

第五十一号 (1964年12月)

なし

第五十二号 (1965年5月)

信仰と実業

(ピリピ人への手紙四章十一節～十三節)

小貫 武寿

クリスマスを迎えて、何時も思うことは日本のクリスマスは実のない、神様の居ない、キリストの居ないクリスマスだということである。最近は一頃のように、バーやキャバレーで騒ぐと言うよりも、家庭で楽しむ、という人が多くなってきましたので、よい傾向だとは思いますが、キリストの生誕を祝う筈のクリスマスに肝心のキリストがいないのでは意味がないことであり、むしろやらない方がよい位である。

日本人は確かに信仰的でお祭りが好きな国民だ。だが、どうも神の観念があいまいである。ここに日本の宗教の重大な？ 陥があるようである。

日本にはいくつも神様があり、神道も仏教もキリスト教も教理は大して問題でなく、もな同様なものとして受取られており、深く理解しようとせず形式だけを簡単に取入れている。だから正月は、神道、春夏は仏教、暮はキリスト教、ということになるのであろう。

クリスマスも、戦後のアメリカ占領の影響で盛になり、年中行事の一つとなつて来たが、多くの人にはパーティと慈善行為をする位に考えられて来ているようである。

とすると、キリスト教とはこんなもの位に思われて、その本質が全然顧みられない危険が出て来る。ここに返つて本当のキリストの教えがまげられて伝えられる危険性がかくされているのである。

熱し易きはさめ易い。軽く受け入れられたものは軽く捨て去られる。

いかなる迫害にあつても消えずに残るものは本物である。キリスト教こそ二千年この方、ネロの迫害やその他数々の迫害に耐えて、益々いい伝え広められて来た本物なのである。又本物であり、眞理だからこそ二千年の歴史を経てもなお消えぬのみか人を動かすのである。

我々はむしろ地味でも、一人一人の心に本物のキリストの教えを説き、福音の味を知ってもらふように、生活を通し、言葉を通し、あらゆる機会を通して種まきして行かねばならないと思う。

さて、その意味に於て、私のつたなき体験も何かの証しになれば幸と思ひ恥をかくこととする。私は商家に生れ、商家に育つた。それ故親達からは単純な断片的な人生の教訓を教えられたのみであつた。それは眞面目に生きることが人生成功の秘訣である。というようなものである。“正直は一生の宝である。”とか勤儉貯蓄が大切とか、そのようなことを繰り返して教えられたものであつた。そしてそれは年頃になるに従つて処世訓となつて行つた。所が私には処世訓は非常にあいまいであつて矛盾が多いこと

が感じられて、悩み苦しむこととなつた。例えば“正直は一生の宝”と教えられ、一方では“正直者は馬鹿を見るのだから正直も程々にしろ”と教えられる。若い私にはどうも理解致しかねる問題であつた。どこ迄正直にすればよいのか、その尺度すらない。眞面目に生きろと教えられて、眞面目に生きようとする、眞面目に生きると損をするから、程々にしろ、と云われるのでは全く判らない。その上その程度も、何もハッキリしたものは何もない。適当に経験から割出して、と云うのであるから、矛盾を感じない方がおかしい位である。私はこのような事から何か本質的な人生のバックボーンになるような処世理論と云うか、生き方はないものか、と常に心の中で求めていたようである。

昭和二十年終戦となり、翌年の五月に家の事情で私は学校を中退し、家業の手伝をすることとなつた。家業は書籍の販売をすることであつた。私は人の道にはづれたことは余りしたくなかつたので、当時闇取引でなく、オープンに売れる本の商売は、活字や思想に飢えている人々にどんどんよい本を供給すると言う仕事であり、よい仕事だと思い、賛成し、努力した。幸い立地条件や時期がよかつたので、非常に繁昌した。

ところが、それでも私の心には、ちつとも満足感や安心感がなかつた。ただ毎日毎日あくせく働かざるを得ず、考える暇とてない自分を見つめると本当にうつろなさびしい気持ちになつたのである。又一方現実的なニヒルな考え方も起つて、いろいろ悩む必要はない。要はどんどん儲かればよいのであって、更に努力して、もつと繁昌させたいと言う衝動にかられるようになつて来た。私には精神的な安らぎを求める心と、たくましく事業活動を発展させようとする野心とが同居していたようである。

そうこうしているうちに、繁昌して忙しくなればなる程、自分を見つめ反省する時間がなくなつて来て、次第にそのような一銭の利益にもならない思考のどうどう廻りよりは、実利的な発展策を考えることの方が先であり、無駄なことだと言う心の方が強くなつて来た。元は私の人生の一つの危機であつた。しかし、私の心の真底では常に何かうつろなものを感じて居り、一度暇を作つて、親元を離れ、静かに自分の行くべき道を考え直して見たいと言う衝動が残つていたのであつた。

ところが幸いにして(当時は不幸にして)昭和二十三年の夏、胸を患つて闘病生活に入り、嫌応なしに仕事と親元を離れて、自分を見直すチャンスが訪れたのである。

私は病の床にあつて常に自己と対決せざるを得なくなつた。しかし、私はここで意外に慾望に弱い自分を発見せざるを得なかつた。安静を保とうとすると邪念^亡想いが馳けめぐり、つまらぬ考え方を繰返す。節制を守ろうと努力すればする程、規律は守れない。

「あゝ我悩める人なるかな」とパウロがロマ書の中で告白して居る通りである。そして今にして思えば、「なぜなら善をしようとする意志は、自分にあるが、それをやる力がないからである。すなわち、わたしの欲している善はしないで、欲していない悪は、これを行っている」。(ロマ書八章十八～十九)と言うパウロの言葉はそつくりその時の私に当てはまるのである。

私は極端な自己嫌悪に陥り、自分を卑下し、生きるのが嫌にさえなつた。「私は、なんというみじめな人間なのだろう」(ロマ八・二四)と病の床で何度か泣き叫んでも

のであつた。眠られぬ夜が続いた。病気の方の快復もはかばしくなく、両親は心配し出した。そしてとうとう晴嵐荘へ送り込まれることになつたのである。

昭和二十四年五月に入荘してからは、ノイローゼ気味だつた私の精神状態も次第に快方に向い、病状も急速に好転した。

しかも晴嵐荘に於ける一年有半の療養生活は、私の精神生活をガラリと変えることになつてしまつたのである。先ずその第一は、長男である私は、今迄一度も他人の飯を食つた事がなく、常に親元にあつた為、学問以外の世間の常識は、親以外の人の考えは全く判らず、自分が正しいと思うことでも、親に相談すると否定される場合があり、ついせまい殻に閉じこもつてしまい勝ちであつたが、突然ガラリと変つた他の社会に住み、いろいろなタイプの人とつき合うことになり、違つた面の人生体験をもつことが出来たこと。

次には、人生の目的を何に置くかと言う根本問題が、キリスト教の信仰によつてハッキリ解決出来たことである。そして私にとって最大の収穫は何と言っても後者であり、神の恩恵を感謝するものである。

入荘以来次第に病は快方に向い、ノイローゼも治つて来たが、私の心中は不安定で何かより所が欲しかつた。療友にも年配で分別のある人も多かつたが、聞いて見ると大体の人生観は、それなりに割切つて“これが人生だ”と言う一種のあきらめに似たものが多かつた。それぞれ人は重荷を負い、あきらめに似た惰性をもつてただ生きようとする。少しでも目先の明るくなることを望んで。

しかし私には何かもつと希望のある、生き甲斐のある人生があつてもよいのではないか、そのような理想を求めて生きるだけでも張合いがある。身体が不自由だからと言つてあきらめてしまうのは少々残念ではないかと思つたのである。

丁度その頃晴嵐荘の中に聖書研究会があり、何人かが熱心に研究しているらしいことを耳にした。私はキリスト教というのは私の育ちからしても余り好きではなかつたので一寸考えようかと思つたけれども友人にも誘われたので思い切つて出かけることにした。

最初は何か参考にする積りで聞きに行つたわけであつたが、何度か説教を聞いているうちに何やらよく判らぬけれども、集る人達が非常に眞面目で熱心であることに気がついた。語る方も当時の不便な交通の中を態々出て来る。患者の中でもなかなかよく勉強している人も居る。私は何となく引かれるので続けて通うようになってしまつた。

そのうちにこの集会の中に教会・無教会の問題が起り、集会が二つに分裂した。私には何故そのような問題が重大なのか判らなかつた。寧ろ自分自身の心さえ正しく保つことに努めるだけで十分ではないかと思つた位である。しかしいざ牧師に洗礼をすすめられた時は、私は何故そのような形式的なものが信仰に必要なのか判らず、受けなかつた。そして心に誓つた。洗礼を受けないで信仰が駄目になるか、受けてどれだけ信仰が強くなるかその辺を確かめて見よう。と思ひ敢えて受けずに終つたのである。

所が、今日に至つて当事洗礼を受けても意外に信仰を離れている人もあるようだ。

私は無教會的な行き方が私の性格に合い、又正しいように思われたので、無教會主義で行くことにした。私はこの時からハッキリと心に誓つて、若し神が許し給うならば、洗礼を受けない自分に信仰を與え、より強めて戴きたい、と願つたのであつ

た。

いわば、回心の転機であつたとも云えそうである。

その後、療友であり、信仰の先輩であるKさんと外気舎で暫く暮すことになり、非常に教えられた。短い期間ではあつたが、信仰の友と二人で祈りと生活を共にしたことは私の信仰上非常にプラスになつた。神の大いなる恩恵と云わなければならない。

私達はこの時、旧約と新約聖書を毎日一章づつ勉強した。そして祈りつつかつ勉強することによつて、いい知れぬ靈的な満足感を味わうことが出来た。と共に、自分のことばかり考えたがる自己中心の生き方から、與うる者は幸いであるという、奉仕することによつて返つてより清い、より美しい、より豊かな満足が得られることを体験した。

しかし、私にはまだ何とも割り切れぬものが沢山あつた。その一つは、あとからあとから出て来る罪の意識である。イエスの教えられる教えは余りにも高いのである。“心の中に思つただけで既に罪を犯す”と云う以上、どうして私のような凡人が之について行けよう。しかしついて行けないまでも、心に思う限り行動でよいことをして行くのが眞実ではないだろうか、ヤコブ書二章十四、十五節で「ある人が自分に信仰があると稱していても、もし行いがなかつたら、なんの役に立つか」と云つている。行為が主でないまでも、行為を無視した信仰のみと云うことは、又ナンセンスではないか。という疑問が頭をもたげる。と思ひながらも、行動に於ては、“己の欲する事は行わず、かえつて自分の憎む事をしている”自分を見出しては、いい知れない嘆きの淵に沈んでいたものである。

幸いにして病状は順調に恢復し、枉荘一年半で退荘を許された。

退荘に當つて私は考えた。私がクリスチヤンとして、神の僕として忠実に生きる為には、家業を継ぐことが果してよいのか悪いのか、若し神がお命じになるならば伝道専一に生きることがよいのではないだろうかと思つて神に祈つたのであるが、特にハツキリと示されたことではないが、やはり、親の期待を裏切ることは悪いことであり、異邦人ばかりの中でも信仰の火を消さなければ、伝道をする機会が与えられるであろうし、返つてキリスト教に反対で無関心である我々商人の中にあつて、旧い思想と闘い、正しい信仰に生きることこそ大きな証しともなるであろうと云う結論に達し、意を決して退荘することにした。

ピリピ人への手紙にも次のように書いてある。

「私は貧に処する道を知つており、富におる道も知つている。わたしは、飽くことにも飢えることにも、富むことにも乏しいことにも、ありとあらゆる境遇に処する秘訣を心得ている。」四章十二節

マタイ伝などでいうように富という問題は信仰上マイナスになり易い。マイナス程度だけならよいがへたをすると0になりかねないのである。イエスはいわれる。「富める者の天国に入るは、ラクダの針の穴を通るよりもむづかしい」と。

勿論富と云うものは財産とは限らない。他位とか、知識とか、努力、その他目に見えぬ富もある。と考えると、富むと云うことは心の問題である。

仮に若し、私が或る程度の財産や地位を与えられたとし、富を持つ立場を得たとしよう。しかし、その富は私すべきものではなくして、神から一時預かるのである。“富

に処する道”としてそれを神の善の為に用いるのである。神が何をなさるかには判らないが、人の救の為に、伝道の証しとして用いるのである。ただ一番の危険は、富には誘惑がつきものだ。

だから強い力をもつて私を引きつけるに違いない。

自分の心の中から、又私の肉親の形に於て迷わせられるのではなからうか。しかし、その時こそ祈り求め勇気をもつて闘わねばならない。

経営学の方でも企業の公共性とか、私企業の脱皮とかが、常に問題にされる。之はどこにでもある人間の弱さの現れではあるまいか。

パウロのこの言葉は、いみじくも、経営学などよりもつと、もつと高い次元に於て富の問題の解決を教えている。

私は今にして、自分の歩みがよちよち歩きであることを顧みず、イエスの福音に接したことを幸と思い、又誇りに思うものである。

この原稿は去る十二月二十七日、クリスマス集會に於て語ったものに加筆して纏めたものである。

第五十三号（1965年11月）

なし

第五十四号（1966年3月）

ただキリストにありて

劉 ??世

(半田記)

はじめに聖書を読ませて頂きます

ロマ・一〇・12～13

「12ユダヤ人とギリシヤ人との差別はない。同一の主が万民の主であつて、彼を呼び求めるすべての人を豊かに恵んで下さるからである。なぜなら、“主の御名を呼び求める者は、すべて救われる”とあるからである。」

ガラテヤ・三・27～28

「キリストに合うバプテスマを受けたあなたがたは、皆キリストを着たのである。もはや、ユダヤ人もギリシヤ人もなく、奴隷も自由人もなく、男も女もない。あなたがたは皆、キリスト・イエスにあつて一つだからである。」

コロサイ・三・10～11

「造り主のかたちに従つて新しくされ、真の知識に至る新しき人を着たのである。そこには、もはやギリシヤ人とユダヤ人、割礼と無割礼、未開の人、スクテヤ人、奴隷、自由人の差別はない。キリストがすべてであり、すべてのもののうちにいますの

である。」

今日はからずも水戸へ参りまして、この集会へ出席させて頂き、霊の糧をたくさん恵まれたことを、心から感謝いたします。霊の糧の力は、限らないものでありますから、頂いた教えを、十分消化するように、許されますれば帰りましてから祈らせていただきたいと思います。

先程御一人御一人紹介して頂きましたが、私の方から何も申し上げておりませんので心苦しく思います。

そこで、ご挨拶をかねて、私がここに参りましたいきさつなどについて申し上げたいと思います。

まず日韓の関係についてであります。政治的ないきさつについては、私の不得手とするところでありまして、その任でもございませぬ。またそうした場合、大がいに“韓国が正しかつたのだ”という前提に立たせられるので困ります。私は、一つの固められた立場に立つてものを語るのではなく、どこまでも、良心に恥じない真実に立つて語りたいたいと思います。

こちらに来て三ヶ月経ちました。この間に一番強く学ばせられていることは、日本に対して、韓国が比較的的正しかつた、ということが、全然成り立たないということでもあります。これは、私が皆様の前で御機嫌とりにいうものではありません。またここで何を言っても迫害にあうことがないからいうのでもありません。私は神さまの前に立たせられて、このことは、真実正しいと思うのであります。

聖書は隣人愛について教えておりますが、それはただ相手の誤りを赦すことで十分でしょうか、私にはどうしてもそう思えない。一体、他人の誤りを赦すことが人間に出来るかどうかと思うのです。

“主の祈り”の中で問題になるのは、私の罪であつて、私たちは、これを神さまから赦して頂いて、始めて隣人を赦す力も与えられるものと思います。

これは、個人の問題であると共に、民族についても同じことがいえると思うのです。この意味で、神さまの前に立つ時、韓国は正しかつた、ということはいえないと思うのです。

金教臣先生の「聖書朝鮮」にある話ですけれど、こういう話があります。

「静岡県にある米屋さんがあつた。朝鮮人の中でこの米屋さんから米を買っていた者がある。そういう者が、二、三ヶ月分の米代を未払いのままどこかへ転居してしまう。それが一人ではない。二人も、三人もそういうことをする。けれども米屋さんは、それをいつも赦していた。」

金先生は、このことについて、こう申されました。「この米の一つ一つを完全に返済するまで、私たちの罪は赦されない」と…。

もう一つは、私の友人であります佐藤さんの引揚げ時の話です。この人は長い間朝鮮におつた方ですが、ほんとうに着のみ着のまま帰つて来られた。

引き上げられる時、大田という町(それは今私の住んでいる町です)の収容所で半日程待たせられたそうです。その時、韓国の運送会社が荷物の運送を引き受け、荷物にそえて運賃までとつたそうですが、その後二十年、一こうに荷物の行先は分らないと

いうのであります。終戦直後のどさくさまぎれとはいえ。私たちはこのように不真実な民であります。私共はこういう人の話を聞きますと、それをよそ事として考えることが出来ない。非常に恥ずかしい思い、そして激しく負目を感じます。それにこういうことを数え上げだしたらきりが無いことでしょう。それよりも、もつと大きな負目は、教育です。韓国の教育は、排日教育です。日本が敗れた日から、排日教育をやっている。うらみがあつたにしてもその日からすつかりなくすべきであつたのに京城には、抗日運動をした人たちの銅像がいつばいあります。憲法の序説も排日から書きだしている。今回の国交正常化で、政府は急に排日教育を訂正しようとしています。

つい最近の朝日新聞の夕刊に、韓国への深い同情の記事が掲載されておりました。その論説はそれなりに十分意味を持つていると思います。しかし、そこにでてくる韓国の人々の対日感情をそのまま当然のこととして受取ることに、私は必ずしも同調することができません。隣人を愛し、隣国を愛するのでなければ、ほんとうに正しい愛国の態度とはいえないのではないか。

これは、キリストを知らない人にはいくらいつても通じないことですがけれども、エレミヤのように、迫害されながら、愛する故のたたかいはたたかわざるを得ないと思うのです。そこに私たちのつきない祈りがあります。

韓国の無教会について

ほかの人のことはともかく、私のことを申しますと盧平久先生の雑誌や日本の無教会の先生方の雑誌を読ませて頂き、小さな家庭集会を持つようになりました。昨年、政池先生が韓国においでになり、私が先生のご講演の通訳をしたことなどが機縁となりまして、日本へ来らせて頂くことになりました。

韓国には、教会がたくさんあります。多分日本よりも多いかも知れません。李承晩イースーマン氏も教会員でした。しかし、教会信仰が底の浅いものであることは、その実である行為を見ればわかります。もちろん韓国で無教会だけが、底の深いものであると、自負する心は毛頭ありません。私たちはみな、神の前に虫けらにすぎない者であります。そして韓国の教会のおちどを、そのまま私たちの、私の、責任として痛感するものであります。

内村先生が説かれたのは純粋な福音であつたと信じます。金教臣先生も内村先生も共に愛国者でした。お二人共、真の愛国者でありました。韓国の兄弟姉妹たちは、このことを強く学んでいます。内村先生から、ムキヨウカイを除いてもなお残るものがあります。それが愛国心と福音であると信じます。私たちはそれを学びます。金先生もそれを強く教えられました。

今度、私が日本へまいりますときに、兄弟姉妹たちの激励の言葉は、“純粋の福音を学んで来い”ということでありました。私たちは、それがなければ韓国は立てないと思つています。

今日、こちらへ参りまして、あたたかい友情に接し、心から感謝しております。ただ私は、こちらの形式をそのまま真似ることは出来ないと思ひます。しかし、純粋の福音を受けることは出来ると思ひます。今朝、こちらへ来ながら、吉原先生が仰言つた“純福音が日本人の血を潔める”そのように、韓国人の血を潔めて欲しいと切に希み

ます。

最近韓国では、キリスト教の土着化ということがさかんに聞かれます。しかし、韓国へ福音が伝えられてから何十年も経た今日において、いまさらキリスト教の土着化をいうのはおかしい、それ程韓国ではキリスト教が韓国人の血となり、肉となつていなかつたことが分り出したわけです。

私たちは、金先生が教えられたように、キリスト教を消化したい。

極端なことをいうようですけれども、金先生のお書きになったことばの中に次のような意味のことばがあります。内村鑑三の戦つた戦からも、ルターの抗争からも、パウロの弁論からも離れ、それと全く無関係であつてもよい。ほんとうにキリストのみにつながることが必要だというのであります。その時、始めて、真のキリストによる一致ができる。それが真の無教会であると私どもは信じます。

確かに日本のムキヨウカイは正しく立派でしょう。しかし、それをただ形の面だけで真似て、寄生虫のような存在であつてはならないと思います。それは韓国を益するどころか、甚だしい損失だと思ひます。先日鶴田先生にそのことをお話しいたしましたら、“そうだ”と仰言つておられました。

昨年六月、日韓問題で昂奮している京城^{ソウル}で、盧先生は、「内村鑑三先生の生涯と信仰」と題して、堂々と講演をされました。真の福音は、人間を大胆にします。形だけ真似たのでは、本当の勇氣は出ない、従つてほんとうの独立もないと信じます。

新田先生と政池先生が韓国へおいでになつて、日本人として公式に、韓国人の前に謝罪のことばを申されました。それは実に私たちの肺腑に迫るお言葉でした。政池先生も新田先生も無教会の先生方であつたということは、偶然でないと思ひます。私はお二人の先生の背後に日本の??友の皆さんのお祈りが天使の翼となつて守護していたことをまざまざと見るようにすら感じたものであります。

無教会の生命とするところは、独立であり、自由であると、思ひます。それから当然、多様性が出てまいります。この多様性に一致を与えるものは、キリストの十字架であると思ひます。それが主にある愛となり、寛容となり、赦し赦されることとなると思ひます。マタイ伝七章十二節のことば「何ごとでも人々からしてほしいと望むことは、人々にもそのとうりにせよ」の通りです。

私は、政池先生がそしてその前に新田教授が、まつさきに韓国に飛んできて下さつたことの中にそのような愛を感じ受けるものであります。

私が今度日本に参ります時に、或人が止めに参りました。「日本に行つてはいけない」というのです。「韓国は、日本の隷属から脱して、漸く独立したんだから今一番大切なことは、主体性を持つことだ。そのためには、アメリカやイギリスへ行つて実力をつけ、それから日本と相対すべきだ。」というのです。そこで私は申しました。

「盧先生も仰言るように、“韓国はたしかに真の独立を打ち立てなくてはならぬ。そのためには、真の独立を学ぶ必要がある。その独立を内村先生の信仰から学んでくることだ”それが私の目的である。」そういつて、私は日本へやつて参りました。

韓国にとつて、韓国内村といつてよい金教臣先生は、終戦直前に亡くなられました。しかし、金先生が基礎工事をして下さつた。先生が韓国の真の独立の基をすえて下さつたと私は思ひます。

それから二十年たちましたので、少しは事情も変つて来たかも知れません。しかし、いかに外側の事情が変つたにせよ、金先生のすえられた独立の基礎石は動かしてはなりません。その上に独立の家を作ることが、私たちに課された大きな責任であると思うのであります。その基礎石はとりもなおさずキリストの十字架であります。

劉先生紹介

先生は韓国忠南大学校の教授の職にあられ、昨年十月、ヘブライ語の研究のため来日されました。勉学の場所は主として国際キリスト教大学、来日の動機についてはお話の内容にあるとうり、純福音主義のキリスト教に接し、韓国のよりよき独立に寄与するため、引いては、日韓両国民の真のかけ橋たらんとされること。一月九日、わざ？？水戸の小さな集會に御出席下さつた。御滞在は、先生御自身の御言葉によると「許されれば、今後一年位(当初は、今年三月までの予定)」とのことでした。

なお水戸とのつながりは、矢内原先生に学ばれ、吉原兄と親しい？？卓植兄の紹介です。本稿は半田が拙い筆記をしたものを、劉先生にお赦しを得て掲載いたしました。従つて文責は半田にあります。

第五十五号 (1966年8月)

職業と人生

鈴木武直

あなたがたのうちに良いわざを始められたかたがキリスト・イエスの日までにそれを完成して下さるにちがいないと、確信している(ピリピ人の手紙一—6)。

世界一の理髪師にならうと思う

私が現在の職業に従うようになったのは、両親のすすめであり、自分でも？？んで修業する気になつたからでもありました。

弟子入りして、白衣を着せられて營業所に立たされた私は、その瞬間“世界一の理髪師にならう”と思つたことは今考えると不思議でなりません。爾来四十四年大正昭和の激動激変の渦中にしかも世渡りの下手な私が今日まで大禍なくやり通して来られたことの中に、大いなるそして、お恵み深い、神の御導きを感じない訳には行かないのであります。

やればできる

技術を身につけるためには並大底の苦勞ではありません。初めから世界一にならうと思つて居る私は、何人よりも勝れた技術を身につけるにはどうしたらいいかと子供心にも思つたのです。先づ第一に誰でもできることで誰よりも上手になろうとして、実行し初めたのが床を掃くこと、刈り落された毛髪を、技術を行つて居る人の邪魔をしない様に処理することでした。萬事このような心構えですべてのことにあつて、一つ一つの技術を修得して、二年後にはその上達を褒められるようになったのです。

そんな訳で“やればできる”と堅く思うようになったのです。

先生は一人

剃刀は何丁も持って、代る代り使うものなのですが、最も自分の心にかなう物は、一丁だけなのであります。何十丁持って居ても最後に残るものは一丁だけなのです。よく世間で、誰からでも善いことは学ばなければならないと言いますが、それは表面だけ、小手先のことならいざしらず眞の技術を身につけ、極意を受けつぐのには、そんな訳には行かないのです。その意味でも私は誠に恵まれました。私の師となるべき人が私の前に顕れ、その先生は理髪のことだけでなく、クラシック音楽の手ほどき、それに「聖書の研究」内村先生発行なども読んで居たり、文学書や絵画などにも深い関心を持つような、大きな影響を与えられたのです。

それは凡て理髪 of 技術を学ぶ上に、大きな役割を果たして居たのです。私は一から十までこの先生を先生として、他の人は顧みませんでした。それは私にとつて、最も幸いなことでありました。

職業名の移り変り

髪結い床、髪床、床屋、散髪屋(関西地方)、理髪、理容、こんなに職業名が変り未だにはつきりした職業名のない職業は、他に類例のないことであると思います。それだけに私たちの職業の性能また性質が一般にも、また業者にも正しく理解されて居ないからであらうと思います。それはともかくとして、理髪という職業は、どんな社会状況の変化にも大した影響を受けない、デフレ、インフレ、新円切替、封鎖のようなこともさほどの影響を受けないのです。彼の大戦争の空襲の最中でも、髪を刈らうとする人間的欲求はなくならばかりかーそのような時程益々強い要望の起るものであることを知らされた訳です。

二つの性質

どんな時でも、髪を刈らずには居られない、髪の手入れをしないでは居られないというのが、人間の極めて自然な情であるこの理髪 of 技術には、生活の便宜上のこと、また会館それに美観を満足せしめようとする二つの性質をもつて居るのです。

生活の便宜上のためのもものは、機械的に行動すればよいのであるから、大した問題はないのであるが、美的感覚を満足せしめる...技術を行うことによつて、外観上その人にふさわしいものとするということになると、これは重大なことになります。これを追求すれば、?? 竟人間は何であるかを知らなければならないことになるのであります。この点理髪師は大哲学者に勝つて悪いということはないのであります。勿論大哲学者でなければ理髪 of 技術者になることはできないということはありませんが、技術者となつた者にとつては、自己の良心の問題となつて来るのであります。

「あなたの髪が横になるか、また縦になるかはフルシチヨフがアメリカの大統領になる、またケネデイがソビエトを支配するようなことがあるよりも、私にとつては大きなことなのです。」と或る時話したことであつたが、決して大げさな表現ではないのです。髪 of 毛一すじの処理のしかたで、その影響は決して小さいものではないのであります。これは技術上のことではありますが、職業を通して、家庭の人、また社会

人、そして国民として如何にあるべきか、また職業を通して如何にして正常なる世界観に立つことができるであろうかと考え、そのような自覚が、どのような働きをして、どのような意義をもたらすものでであろうかと、考えた時に、私たちの職業も、他の如何なる職業とも同じであつて、軽視されたり、蔑められたりすることは許されないのであります。

使命

「木口小平はラツパを口にあてたまま敵の弾にあたつて倒れました。それでも口からラツパをはなしませんでした。」これは小学生になつた私たちが声高らかに、讀みあげたもので、木口小平という人はほんとうに偉い人であると子供心にも強く思つたことでありました。

その人はその人らしく生きるということは容易なことではありません。高尚な理想なくして、ただ楽しく多くの収入を得たいと思つても、その欲望がかりに充たされたとしても、決して??ばしきことではありません。徒らなる享樂を追つたり、守銭奴的な生活の空しいものであることは、古来の人々の述懐に聞くまでもないことであります。秀吉の「露とおき露と消えぬるわが命難波のことは夢のまた夢」やソロモン王の「空の空なるかな、いつさいは空である。」などは凡て人の周知のことです。ように全く、そのような欲望を充たそうとする末路はまことにあわれなものであることはいふまでもないことであります。

衣食足りて礼節を知るといわれますが果たしてそうでありましょうか、衣食足つてからでなければ知ることのできないような礼節は、眞の礼節でないことは何人も知り尽くして居る筈なのであります。物質的に豊になれば、人間として価値のある生活ができるかというにそうではない。時間的に余裕があれば意義のある活動ができるかというに決してそうではないのです。

これは自分にとって、是が非でもやらなければならないことであるという、強い意志が起つて、初めてなし得るのです。経済的にまた、時間の余裕があるような時、その時こそ反つて、眞に成すべきことができなくなるようなことの方が多いのではないかと思うのです。大事な用件を依頼する時は、暇で遊んで居るような人にたのむものではない、とは世馴れた人の常識であります。それはともかくとして、私のように四十余年同じ職業に大した事故もなく、續けられたということは、自分の意志や周囲の要望だけで、できるものではないということを痛感せしめられるのです。

福沢諭吉という人が時の政府から教育功労者として叙勲の沙汰があつた時、自分は教育者として、教育のために、自身を投じたのであるから、それによつて、いささかのことがあつたからといつて、あたりまえのことである。自分のようなものにどうするというよりは、隣家の豆腐屋や、車を引く事を業として、多くの人の便宜を計つて居る人々に、眞先に勲章をやつてほしい。というようなことをいわれて、自分の受賞を断つたということであるが、これが、士、農、工、商、と職業の階級をはつきり付けて居た時代のことであるから驚きます。職業には貴賤はなく、凡ての職業は平等である、“天は人の上に人を作らず、人の下に人を作らず”といつて凡ての人は平等であることを、身をもつて生き、他人にも徹底させようとしたのであるからたいした人だと思ひます。福沢諭吉という人がこのような態度で、自己の職業に徹し、自己の職責

をまつとうできたのは、教育という事業に深い使命を感じて居たからであると思いません。

日本語の職業という字をどう讀んでも、職業という意味を引出すことは甚だ困難であります。業という字は佛教のカロマから来て居るとすれば、いささかの意味は感じられないこともない訳ではありますが、天職となると職業本来の意味がいくらかは感じられるのではあります。英語ではコーリング(Calling)、ドイツ語ではベルーフ(Beruf)というのですが、英語のコーリング(Calling)もドイツ語のベルーフ(Beruf)も同じ意味で、“呼び出す”という言葉であります。職業は、救主キリストの神が、私たち一人一人を、羊飼いが一匹一匹の羊の名を呼んで檻からつれだす(ヨハネ一〇—13)のように、一人一人をよく知って呼び出すのであるというのです。コーリング(Calling)もベルーフ(Beruf)も職業の厳粛で深い意義を伝える言葉として、ほんとうにふさわしい言葉であると感じさせられます。このように職業というものは、その職業にたづさわつた者が、それによつて、何物かを得ようとする下向きの姿勢よりも、偉大な力に従って行かなければならないのであるという、上向きの姿勢の大事なことを知らなければならぬのであります。そのことの意義がわからなかつたら職業の何んであるかを、知ることはできません。そして偉大な力に支えられて歩まされて居るのであるという目覚めのない限り、その人はその人らしく歩むことはできません。従つて自己の職業に従ふことの真の??びはなく、自己の職業を誇りとするような心境にはなれないのであります。職業を通じて、強い使命を感じてこそ自己の職業に誇りをもち、明るくそして、高い希望が起つて来るのであります。

生活の原理

一般に生活というと経済のことを思う、しかしそれはあくまでも、第二義的なもので、如何に人間らしく生きるかということにあるのでありまして、人間が人間らしく生きるということは、如何に道徳的に生るかということでありまして、人生の真の目的は、高い品性を備えるにあるということが出来ます。内村先生が京都に居られた時のことですが、奥様の実家を訪問された、実家では、先生の御生活の窮状を察せられて、米やもちをさしあげたのです。一応は有難くいただいて帰途についた先生は、途中現在の生活の不甲斐なさを辱じ、通りかかつた五條の橋の上から、もらつて来た風呂敷包みをそのまま川の中へ投げこんで、さつそうとして帰宅されたことが、少年物語となつた内村鑑三にあつたのを讀んだのでありましたが、心の引きしめる思いがしました。

生活の目的が判然としないと、生活に密着して居る経済のことに迷い、まどわされ勝ちになるのです。しかしこの経済—物とか金—に対するはつきりした考えを明かにすることは缺くことのできないことなのであります。内村先生の「商人と宗教」というパンフレットの中で、金をたくさんもうけたということは、決して、もうけない人の思うほど、幸いなものではなく、ある意味ではかえつて不幸なことである。富者であるという誇りのうちにあつて得意の人もありますが、およそ人がその所有する物質をもつて誇るときは、その人の品性は、はなはだしく下落した時である。そして富は人と人との関係を不純ならしむるものである。富者に対しては、たいていの人が、へ

つらいと卑屈といつわりをおこないます。うわべだけ富者を尊敬します。気に入るようなことを、おこなつたり言つたりします。けれども腹の中ではわるく思っています。従つて、誰でも実意というものを示す人はありません。富者は人々から形の上だけでうやまわれて、心では遠ざけられるのであります。従つて、世に富者ほど孤独なものはない、かつまた富者の前にたくさんの人が屈従するのを見て、富者は、人間がいかに卑しきものなるかを感じるのであります。金の前に拝跪する人間のみにくさを痛切に見せられるのであります。すなわち富者は人間のうちのつまらぬ人のみが目につきまします。云いかえれば金は人を卑しく見せしめるものであります。」??かつこの始まりがない??と金銭や物に対する人間の姿を具体的に述べて居ります。金は生活の上で極めて重要な位置をしめて居りますので、これを正しい認識の上に立つてこれに当たるか、そうでないかは、精神生活を重ずる人生にとつて大きな問題となつて居ることであることは云うまでもないのであります。物と云い、金と云い、これを卑しめたり軽ろんじたりする事は出来ません。正しく使用することができれば大きな力とすることができるからであります。家庭を健全に建てる基本ともなり、社会を益し、隣人を助けることもできる、国に正義を行わしむる原動力ともなる尊い器ともなるからであります。人間を誤ませるものも金、執着せしめて人間生活を虫ばむのも金、しかし恐るる必要は決してありません。勤勉と質素とをもつて、大胆に活用することによつて、生活を前進せしむるようつとめるべきであります。

カイザルのものはカイザルに

だれでも同時に二人の主人に仕えることはできない。こちらを憎んであちらを愛するか、こちらに親しんであちらを疎むるか、どちらかである。あなた達は神と富とに仕えることはできない。(マタイ六・24)いつどんな時でも、迷うことなく自己の生活を正しく進めることのできる道はただ一つだけです。或る時イエスをおとしいれようと、たくらみをもつた者に、「カイザルのものはカイザルに、神のものは神に返せ。」といつたので、おとしいれることができないばかりか、そのうけ答えぶりに驚きながら黙つてしまつた。(ルカ二〇-20~26、マルコ三-13~17、マタイ二二-15~22)カイザルの物すなわち金、金には金としての分がある、そして神のもの、それは人間の自由意志、すなわち魂。この自由意志は神からいただいた人間にとつて一番大事なものである、これほどこまでも神のものとして、きずなく、汚れないものとして守らなければならないのです。そして神のものは神に返せといわれたように、私たちの魂はあくまでも、神以外の金やその他のものに奪われることなく、神に返さなくてはならないのであります。“だからあなた達は、天の父上が完全であられるように“完全になれ”(マタイ五-46)とあるように、私たち人間には、どうしてもそうしないでは居られない、そうなりたいという重要な面のあることを知らなければならないのであります。

充たされし希望

しかし人間というものは弱いもので、迷いやすく、禍誤を犯しやすいものです。四十にして惑わず、五十にして天命を知る。とありますが、そういう面もあります。し

かし人間は幾つになつても迷います、動揺します。眞剣に生きたい、また生きなければならぬ、そう思つて生活に当るのですが眞剣になればなる程思うように行かない弱い自分を発見させられるのであります。私は獨立して同じ場所で營業するようになってから満三十年以上になりますが、開業した時から現在まで何の進展もありません。いささかの設備の改繕はできたといつても、経済的な発展は得られなかつた、私は三十年間營業して、店が古くなったのと、よくも年をとつたものだと思つて見るべきものは何一つないのです。營業の成果である物質的なものでは、私の今日までの働きは全く見る影もない姿なのであります。しかしながら少年の時、心に描いた“世界一”は内容は変わりましたが、たしかに自分は世界一の理髪師であるという自覺に立つたのであります。失敗したとか、成功したとかの外側の條件に左右されない、目には見えないが、これこそほんとうに生甲斐のある新しい希望の世界が、頑固な私の、魂が打ちくだかれて、その上に新しく、建設されるようになってしたのであります。そして現在の境遇を心から喜び感謝しないでは居られない心境に立たされたのであります。そしてキリストを信じ、キリストに頼りたのむ生活は、どんなに巧みな経済的に勝れた知者にも勝るものであることを教えられます。「空の鳥を見てごらん。まかず刈らず、倉にしまいこむこともしないのに、天の父上は養つて下さるのである。あなた達は鳥よりも、はるかに大切ではないのだろうか。」(マタイ六-26)たしかに多くの人達は生活の建てかたをとりちがいて居るのです。人間としてあるべき姿を失つて居るため、得ようとして益々失うようなこととなつて行くのです。人間として価値のあることを成すにはどうすべきであるかということを探求しなくてはならないのではないか—人間が眞剣に求めるべきもの、それは神の国と神の義であると聖書にありますが、私もそうだと思います。そしてそれは、萬人にとつて、生活の基本とならなければならないものであると思います。若し神の支配する御国と、神に義とされることを求めることを第一のこととし、最上のこととすることができるとするならば、そのときからほんとうに、あすのことは心配する必要がなくなり、一日の苦勞は一日の??びとなり、感謝のうちに終ることができるようになるのであります。

奉仕

今まで述べて来たような心境になつて、職業を営む時、自然と奉仕の精神が溢れて来るのであります。奉仕の精神に立つて成す職業は凡て聖職であります。そしてこのような心境に立つて成す職業に伴う勤勞こそ眞に尊ぶべきものであります。パウロがテサロニケ第二の書で、福音を宣べ伝える者の態度を極めて具体的に述べているが、テサロニケ第二三-6-16参照)??)の最初の(がない??)凡ての職業人が、自己の職業を神に捧げて、神と偕になす職業、これが眞の職業であり、そのような自覺に立ち得た時の職業による勞苦、苦痛は、神の慰めとなり、はげましとなつて、そのような人の職業を通して、神は御自身の栄光を現すのです。そしてそのような人々によつてなされる職業にふるる人々をも、神は救いに導かれるのであります。このように信仰に立つて成す職業こそ眞の奉仕と云われるべきものであると思つるのであります。

「人の子がきたのも仕えられるためではなく仕えるためであつて、多くの人のあがないとして、自分の生命を与えるためである。」(マタイ二〇-28)

—以上一九六六年五月二十二日、水戸南町二丁目商店会館で水戸無教会聖書集会で述べた話の要旨

彼の時の話は奉仕の所はほんの少し切り述べられませんでした。その後「人と人との関係」「社会的前進」と用意した原稿には少しも觸れることができなかつたのは残念でした。

七月二日夜

第五十六号 (1966年10月)

なし

第五十七号 (1967年5月)

パウロの募金の愛とその歴史的背景
宇野 輝

七章迄でコリント教会の人々と、感謝に溢れる和解の成立を喜んだパウロは、ここに教会内部の問題から一転して、年来の宿志であつたエルサレム母教会に対する愛の献金の要請に移る。八章と九章である。

だが、私は今日は、暫くの時間を、パウロがその手紙の中で屢々説いている献金の問題(コリント1の十六・1-4。ロマ十五・25~31。ガラテヤ二・10等)のもつ意味と歴史的背景について少し学んでみたいと思う。

初代のキリスト教徒のなかで、パウロの果たした最も大きな役割は、イエス・キリストの十字架の死と復活の意味を明らかにしたことである。即ち律法と罪からの全き解放、自由の福音のもつ本質を、啓示と体験を通じて、パウロ程深く思索し、又鋭くその本質を把握して辯証的に表現し得た使徒は他になかつた。

最も明確純粋な形で、福音による救は人間の側の努力功績によらないこと、神様の全く一方的な恩恵のみによる救であること、新しい生命の贈与であることを、ロマ書の前半や、ガラテヤ書にみられるように論理的に宣言したのがパウロであつた。

福音は、もはやエルサレム神殿を中心とするユダヤ教の一分派ではなく、又ユダヤ教の伝統に束縛された、つまり、民族的な律法祭儀の習慣に支配されていたユダヤ教的キリスト教からも、その絆をたち切って脱皮解放を宣言したのである。その戦を戦つたのがパウロの戦である。言いかえると、神様の救にあづかるために、モーセの律法を守り、ユダヤ教の宗教儀式に従つて肉体の一部に割礼を受け、自己の努力修業を積み重ねて、その功績の力で救はれようとする、自力本願の態度を一擲したのである。(これは神様の聖義に、自分の正しさを対抗させて、救の権利を主張する態度であるが)それとは反対に、唯々、キリスト・イエス様の十字架を仰ぎ視ることにより、自分の罪の深さと、そのような自分を十字架の刑罰に於て贖い返して下さった神様の御恩恵を信じ奉り、恩恵に碎かれて我身一切の救をゆだねて、ひたすらに信じ奉る、否、

一人の罪に死んだ魂を追い求めて、死の贖いをもつて其の肩にかけて凱戦して下さった、このイエス様の信頼と御恩恵に応え奉る！。この信仰による救。

これこそパウロの宣べた自由の福音である。これを他力本願と言うべきか、否、この私を愛して迫り来る厳かな実在である。私もまた屢々旧約の詩人と共に「わが不義われに追いしきて仰ぎ視ることあたはぬまでになりぬ」詩四〇、との思いに沈む。そのとき、かく迄にこの私を追い求めて下さる十字架と復活の厳かな事実にかき立てられるのである。

何一つの功績もなく、唯一言の申訳もせず唯イエス様を十字架に仰ぎ視奉る、あのルカ伝二十三章の三つの十字架の悪人の救こそは、パウロ福音の最も純粋な証明であると信じる！何と言う希望であろうか！。

且つては熱心な律法主義者、パリサイの子であつたパウロ自身が自ら体験せしめられた鮮やかな百八〇度の回心を、後にピリピ書の三の3-11の中でキリストに捕えられた者の美事な価値観の転換として画いている。

然し初代キリスト教会のすべてが斯様な福音信仰に生きたわけではなかつた。ユダヤ教のモーセ律法の伝統の束縛と影響力の強いエルサレムを中心とするキリスト教会の人々には、かような脱皮が出来なかつた。

パウロの宣べた福音と、エルサレム教会の信仰との間には聖書のいくつかの個所を併読対比してみると、むしろ鋭い対立の緊張関係にあつたことが解る。

イエスの福音と最も鋭く対立したのは、厳肅真面目に生きたパリサイ人の律法主義者であつた。今また自由の律法と律法主義的信仰が対立する。いま二つの個所を引いてみると。

はじめにガラテヤ書五章1-12節迄。

「自由を得させるために、キリストはわたしたちを解放して下さつたのである。だから、堅く立つて、二度と奴隷のくびきにつながれてはならない。見よ、このパウロがあなたがたに言う。もし割礼を受けるなら、キリストはあなたがたに用のないものになろう。割礼を受けようとするすべての人たちに、もう一度言つておく。そういう人たちは、律法の全部を行う義務がある。律法によつて義とされようとするあなたがたは、キリストから離れてしまつている。恵みから落ちてゐる。わたしたちは、御霊の助けにより、信仰によつて義とされる望みを強くいただいている。キリスト・イエスにあつては、割礼があつてもなくても、問題ではない。尊いのは、愛によつて働く信仰だけである。そのような勧誘は、あなたがたを召されたかたから出たのではない。

少しのパン種でも、粉のかたまり全体をふくらませる。あなたがたはいささかもわたしと違つた思いをいただくことはない、主にあつて信頼している。しかし、あなたがたを動揺させている者は、それがだれであろうと、さばきを受けるであろう。兄弟たちよ。わたしが今でも割礼を宣べ伝えていたら、どうして、いまなお迫害されるはずがあるか。そうしていたら、十字架のつまずきは、なくなつてゐるであろう。あなたがたの煽動者どもは、自ら不具になるがよからう」。尚ガラテヤ書二章15-21節も併せ読んで頂くなら、エペソを中心として小亜細亜とギリシヤの諸教会でパウロの宣べ伝えた福音がどのようなものであつたかが理解される。パウロは律法による救と割礼に終止符を打つて、キリスト・イエスの福音にかき立てられた全く新しい人であつた。

次に、このパウロののべ伝えた福音に対して、母教会であつたエルサレム教団の信仰はどうであつたか。その消息を伺い得る個所として使徒行伝の二十一章17-26節迄。

「わたしたちがエルサレムに到着すると、兄弟たちは喜んで迎えてくれた。翌日パウロは彼らにあいさつをした後、神が自分の働をとおして異邦人間になつた事どもを一々説明した。一同はこれを聞いて神をほめたたえ、(喜んで迎えてくれ、神をほめたたえたエルサレム教会の兄弟ではあつたが、=筆者が調和を尊ぶルカである事も考慮するとき=パウロ一行を迎えたエルサレム教会員の底流は決して穏やかなものだけではなかつた。)パウロのモーセの律法にそむく福音の報告はヒンピンとエルサレム教会に達し又噂はひろがつていた。そして彼に言つた、(ヤコブをはじめとする主脳部は明らかにパウロ一行のエルサレム到着に困惑していた)

「兄弟よ、ご承知のように、ユダヤ人の中で信者になつた者が(=ユダヤ教からキリスト教に帰依した者)数万にもものぼつているが、みんな律法に熱心な人たちである。ところが、彼らが伝え聞いているところによれば、あなたは異邦人の中にいるユダヤ人一同に対して、子供に割礼を施すな、またユダヤの慣例にしたがうなど言つて、モーセ(の律法に)にそむくことを教えている、ということである。どうしたらよいか。あなたがたがここにきていることは、彼らもきつと聞き込むに違いない。ついては、今わたしたちが言うとおりのことをしなさい。わたしたちの中に、誓願を立てている者が四人いる。この人たちを連れて行つて、彼らと共にきよめを行い、(ナザレ人の誓願といつて、ユダヤ教の潔斎精進の宗教行事でその満願の日にはエルサレム神殿への献物には多額の費用を要した。又パウロ自身が異邦人の間で生活したことの身の汚れを潔めるため、彼等と共に「七日」間の潔めを受けなければならなかつた。エルサレムキリスト教会の信者の中でかようなことが別に不思議にも思われず行われていた点に注意)また彼らの頭をそる費用を引き受けてやりなさい。(満願の日)

そうすれば、あなたについて、うわさされていることは、根も葉もないことで、あなたは律法を守つて、正しい生活をしていることがみんなにわかるであろう。異邦人で信者になつた人たちには、すでに手紙で、偶像に供えたものと(コリント1の八・4、8、13にパウロの考え方)、血と絞め殺したものと不品行とを慎むようにとの決議が、わたしたちから知らせてある...」。

さきに引照したガラテヤ書五章と対比して如何に大きな喰いちがいであるか、まさに、救に対するかかる信仰対度は、ガラテヤ書の精神からすると「異なる福音」であり「これは福音と言うべきものに非ず」一・7である。

聖書中、福音書に於ても、パウロ書簡に於ても、屢々注目すべきは、反対者側に立つ者の証言である。それらは必ずしも虚言ばかりではない。彼等の証言を公正に観てゆくと、屢々むしろイエスの、或はパウロの福音の本質を浮彫りに証明する影の役を果たして真実なのである。パウロの福音の本質が果して「子供に割礼を施すな、またユダヤの慣例にしたがうなど言はなかつたであろうか。彼等の言う通り「モーセ(の律

法)にそむくことを教えている」とみられなかつたか。彼等の律法観より見て「あなたについて、うわさされていることは、根も葉もないことで、あなたは律法を守つて、(ユダヤ教流に)正しい生活をしている、その事の証明となり得たか。むしろ「数万にもぼるユダヤ教の改宗者」と「みんな律法に熱心な人たち」である一句こそ、エルサレム教団の信仰がユダヤ教に近いものであつた事の証明ではないか。彼等にとつて神の選民として、聖なるモーセの律法を守ることは、依然として救の要件であり、割礼を受けることは彼等の教団に受け入れられるに「あつてもなくても問題ではない」ことではなかつた。否、割礼なき汚れた異邦人(ユダヤ人は異邦人を「異邦人の罪人」と併称してさげすんだ)と食卓を共にすることは許すべからざる律法違反であつた。伝統の軛は重いのである。尊厳な願望、直感の鋭い、比較的福音の本質を理解したと思われるペテロですらもアンテオケの教会に於ては躓づいたのである。(ガラテヤ二・11-14)。

注目すべきは、あれ程パウロとその一行が労苦してエルサレムの貧しい兄弟達にたずさえた愛の献金について一言も觸れられていないことである。

福音の最も純粹な流れは、その最初から、イエスに肉に於て隨身した人達によつては承継がれなかつた。恐らくエルサレム教会の中でイエス・キリストの死と復活の意味を靈的に最も深く最初に理解したのはヘレニストユダヤ人ステパノであつた。ステパノは福音の救と神殿宗教の分離を主張して、ユダヤ教の偽善に対して批判を加えたのである。殉教の血によつて生命を得た福音は迫害の嵐の中に旧きエルサレムから四散した。伝統を守る者達は何が自分達に危険であるかを直感する。イエスを審いた神殿宗教者達の最も厳しい反撃を呼んだのはステパノとその同志であつて、イエスに親しく隨身した使徒達ではなかつたように思われる。

そして??てステパノの福音の流れは同じヘレニストであつたパウロに、不思議な摂理で承継がれた。たしかにエルサレムに踏み止まつて信仰を守つてゆくことは勇氣を要した。又行伝の四章から五章にかけてのペテロの捕縛と投獄訊問の記事には、宣教的的色彩はあるにしても、迫害が次第に厳しさを加えていることが伺われる。それでも尚、ユダヤ教に於ける異端瀆神の偽教師に対する異端尋問の厳しさを考えると、恩師イエスの審かれた同じエルサレム神殿の庭で、その弟子達がイエスのメシヤを証し得た内容は血の反撃を呼んだステパノとは異なるものではなかつたかと思われる。ペンテコステの初期に於けるエルサレム教会の柱はペテロであつた。然し行伝十五章の使徒会議の頃になると、ペテロと共に比重は次第に、靈的關係であるよりも、血属關係が重んぜられたユダヤに於て主の兄弟ヤコブに移つて行つた。このヤコブは「義人ヤコブ」として律法に忠実を以て重きをなした人である。臆てペテロも(恐らくヨハネも)福音を伝えてエルサレムから遠く去るに及んで、主の兄弟ヤコブが教会の柱となりエルサレム教会の信仰はユダヤ教に近い保守勢力に占められるに至つたであろう。又エルサレム教会員の特別な恵であつたイエスの復活の証人達も、罪の贖いの問題、靈魂の新生によつて靈なるイエスと深く結ばれないとき、それは臆てユダヤ教で待望されたメシヤ信仰に近いものと化して行つたのではないかと推察する。即ち律法に厳格なユダヤ教徒で復活信仰をもつ真面目な「パリサイ派から信仰にはいつて来た人た

ち」(行伝十五・5)が勢力を占めて行ったと思う。

註、真面目なユダヤ人が割礼を如何に神聖な儀式として重んじたか...「ユダヤの母親たちは彼女達の息子に割礼を受けさせるのを放棄するより殺される方を選んだ。」彼等はそこに真の神の民のしるしをみたのである。割礼を受けないことは「契約の子でなく、破滅の子」に属することであった。(ダニエル・ロブス、「イエスの時代の日常生活」波木居代訳一卷P175。

エルサレムの教会はユダヤ教から多くのものを承け継いだ。エルサレム神殿が全世界のユダヤ教徒に対して絶大な信仰的支配力を握っていたように、歴史的なイエス・キリストをもったエルサレム教会は、使徒達の権威をもつ母教会としてキリスト教徒に対して監督権と指導権をもち、更にユダヤ教の十分の一税(宮への納金)の如く、少くともユダヤ人クリスチャンに対しては献金の義務を負わせたのではないか。唯、パウロのように自ら開拓した異邦人クリスチャンの教会に対しては強制するに至らず、使徒会議の要請(エルサレム教会の貧しい人々をかえりみるように)ガラテヤ二・10に止まったのであろう。

ユダヤ教は伝道宗教であった。なかんずくパリサイ派のラビ達は「海山をめぐりて」熱心に布教した。彼等はローマ世界の各都市に離散して、そこに会堂を建てて安息日を厳守しているユダヤ人達に巡回伝道者として訪づれた。パウロ自身も福音を宣べ伝えるにあたって同じ方法をとった。道徳的に頹廃したギリシヤ世界の中で、唯一の神を信じ厳粛真面目なこれ等会堂に安息日を守るユダヤ教の人々に対して、真面目な異邦人が尊敬の念をもって、「神をうやまう人々」としてとりまいていた。然しユダヤ教独特の排他的な奇妙な習慣律法が彼等にはなじみ難いものであった。

パウロの福音はこれ等の異邦人の心を捕えたのである。然しエルサレム母教会員であるとの特権意識をもった保守的な律法遵守を主張するクリスチャンがパウロの開拓した教会に入りこんできて、パウロの宣べ伝えた自由の福音、恩恵のみを信じて救われる福音を乱したのである。この本質を鋭く洞察するパウロにとって、割礼の問題は自由の福音に立つか、律法の滅びに逆転するか救いの歴史をわかつ重大な岐路であった。パウロにとって、これは全精根を傾けた渾身の戦であった。ガラテヤ書はその金字塔である。

明瞭なユダヤ教徒とことなり、彼等は羊の装をしてはいりこむ狼であり、「偽兄弟で」ある。忍びこむ「犬」である。「肉に割礼をもつ者」のかゝる福音は、「福音というべきものに非ず」と痛罵する。

「人は生れながらのカソリックである」そのように又、人は神に似せて創られた高貴な道德律法を慕う生れながらの律法主義者なのである。如何に厳しい悲哀の戦がこの中に秘められていることか！。この戦いこそは尚今日私等の戦である。律法を捨て、自己の牙城をイエス・キリストに明け渡して、唯々十字架のみまえにひれ伏して、私の罪は彼処に赦され、私の義は彼処にのみ完成されたと、仰ぎ視て讚美し得る者、これが十字架のキリスト者である。

肉にのみ割礼をもち「心に割礼なき」(エレミヤ)これ等偽兄弟達は、文字通り「生

みの苦しみ」の中からはぐくみ育ててきたパウロのコリント教会の中に入りこんできて、イエスに随身しなかつたパウロの使徒職の権威に攻撃を加えた(彼等は言ったであろう。「自称使徒のとなえる。神の律法を守らずどもよい杯という勝手な福音はエルサレム教会では通用しない」と。)さらにエルサレムの貧しい兄弟達に対する愛の募金に対しても鄙劣な中傷を加えて、パウロが私腹を肥やしている杯と噂したのであろう。

「私は貴下方に重荷を負わせなかつたとしても、悪がしこく、あなたがたからだまし取ったのだと人は言う」(コリントIIの十二・16)エルサレムへの献金にあたって、パウロが諸教会に代表者達を選ばせて、これに献金を託したのもかかる噂を封ずる配慮であつたと思われる。(コリントIIの八・19、20)

福音を誤解から守るためどんなにパウロが戦つたか。「わたしのこの両手は自分の生活のためにも、また一緒に居た人たちのためにも働いたのだ」と諭し得た(行伝二〇・34)。パウロは、福音を伝えて生活の資を得る、律法にも許された使徒の権利を屢々放棄した。「そうされるよりは、死ぬ方がましである。わたしのこの誇りは、何者にも奪い去られてはならない」と独立自尊、福音の代償を求めて乞食となることを潔しとしなかつた。(コリントIの九・15)ルッターによつて承けつがれた“基督者の自由”、自由の福音の戦こそは、今日又我等の戦でなければならぬ。私も且て青年時代に黒崎幸吉先生の御訳により「ルーテル加拉太書註解」を拝読したときの感銘を今も忘れることは出来ない。ルーテルのガラテヤ書は、またあの有名なジョン・バンヤンの苦しむ靈魂に“大いなる慰め”となつた書物である。(ジョン・バンヤンの名著、「罪人の首に恩寵溢るる」の中にはルーテルのガラテヤ書が紹介されている。)

このような自由の福音に対するパウロの火の如き情熱と戦いが又徹底的精神が初代教会に於て異邦人伝道の基地教会であつたアンテオケに於てペテロと衝突し、彼の先輩格であつたバルナバとすら袂を分つ原因となつたと思う。孤立無援、かくして自由と独立の福音は、ひとり聖霊の導くが俛にパウロの胸に燃えつづけてタウルスの山々を越え、キリキヤの荒野を横切つてトロアスの岸边に立つた。アジアから欧州に福音は海をこえて伝えられた。

パウロの異邦人の使徒という自覚と誇は、それは単に地域的な、或は人種的な相違ばかりではなく、又戦を通じてパウロが体験し、把握確立した福音信仰の質の相違をも示すものである。それは且て「収税人と遊び女が学者パリサイ人に」先んじて信じ救はれたように、今又「異邦人と罪人」が律法なくして、割礼なくして、信仰のみによりて救われる福音であつた。

それは又教会の在籍名簿と洗礼者名簿に記載されることの必要なき自由の福音でなければならぬ。それは「肉の割礼」ではなく日々「心の割礼」であり、すべてキリストの御霊なき者は(よし教会生活幾十年であつても)キリストに属するものに非ずである。“無教会”もまた外形の問題ではなく、十字架のみまゑに碎かれた日々の魂の問題でなければならぬ。

以上私は、パウロの宣伝えた自由の福音と、得る誰無母教会の信仰の内容的相違に

ついて少しく学んでみたのである。

紀元五十七年の春、地中海の偏西風が納まると共に、パウロはコリント教会を発つて、諸教会の選ばれた人々に託された、エルサレムの母教会の貧しい人々に献げられた募金をたずさえてエルサレムに旅立つた。エルサレム母教会に聖霊の降つた意義深いペンテコステ(五旬節)迄に到着するのがパウロの願であつた。それは又、海の内外の多くのユダヤ人がエルサレムの宮に集つて収穫の初穂を献げる意義深い感謝祭の日でもあつた。

それについてはコリントを旅立つ以前に書かれたローマ人への手紙の十五・25に「しかし今の場合、聖徒たち(註、当事エルサレムの教会の兄弟達を呼ぶに固有名詞の如く使はれていたと思われる)に仕えるために、わたしはエルサレムに行こうとしている。なぜなら、マケドニヤ(ピリピ、テサロニケ教会のある北ギリシヤ)とアカヤ(コリント教会のある南ギリシヤ州名)との人々は、エルサレムにおける聖徒の中の貧しい人々を援助することに賛成したからである。」と語っている。更にその時の心境について「兄弟たちよ。わたしたちの主イエス・キリストにより、かつ御霊の愛によって、あなたがたに願する。どうか共に力をつくして、わたしのために神に祈つてほしい。すなわち、わたしがユダヤにおける不信の徒から救われ、そしてエルサレムに対するわたしの奉仕が聖徒たちに受けいられるものとなるように」と語っている。この旅の途中、トロアスに於ては、パウロは、ユダヤ人によるパウロ暗殺の陰謀のあることを知って、一行とは別に陸路をとつて難をさけたと思われる。(行伝二〇・3)。

更に行伝二〇・17以下を読むと、パウロは使をたてて、彼の生みの教会であるエペソ教会の長老たちをミレトの港に呼びよせて訣別の挨拶を交わしている。それは今も尚讀む者の胸に眞実迫る訣別の遺訓ともいべき言葉である。

「今や、わたしは御霊に迫られてエルサレムへ行く。あの都でどんな事がわたしの身にふりかかつて来るか、わたしにはわからない。ただ、聖霊がいたるところの町々で、わたしに、はつきりと告げているのは、投獄と患難とが、わたしを待ちうけているということだ。しかし、わたしは自分の行程を走り終え、主イエスから賜つた、神のめぐみの福音をあかする任務を果し得さえしたら、このいのちは自分にとつて、少しも惜しいとは思わない」とのべている。

もつて、パウロが自ら福音を宣べ伝えた生みの諸教会から、エルサレム教会の貧しい兄弟達に贈られる愛の献金を、御霊に迫られる厳粛な責務として、生命を賭して遂行したかを伺い知るのである。

パウロの終末観は勿論ユダヤ教の終末観とメシヤ待望に深く影響され、又初代キリスト教徒のキリスト再臨の信仰でもあつた。然し又異常なその切迫感はその預言者的眼光に映つた罪責感と神の聖義と審判必至を切離しては考えられない、それは又彼の福音の戦の厳しさとも密接に結びついていたのであろう。ローマの世界にビ漫していた頽廢を私達はロマ書のはじめにも、コリント第一の書中にも読むのである。その切迫した時の中で、帝国の首都ローマと、世界の果に迄福音を伝える責務を自覚するパ

ウロが西を望みつつ、今、東のエルサレムに向うのである。

何故であつたか？

ここに私達はパウロが如何にイエス・キリストの十字架の愛にからめられて、福音に生かされたかの実証を観るのである。キリストの十字架によつて贖われた総ての兄弟は愛に結ばれなければならない。「主は一つ、信仰は一つ、バプテスマは一つ、すべてのものの上にあり、すべてのものを貫き、すべてのものの内にいます、すべてのものの父なる神は一つであり」未だ異教の偶像教の中にとりかこまれてユダヤ教の蔭に新しい生命を伸しつゝあつたキリスト教は、内に兄弟恒にせめぐ分裂を喰止めて一致協力が必要であつた。且又パウロを救つたのは霊のキリストであり、パウロの信仰は生ける霊のキリストとの結合の中に活力を得たのではあるが、そのキリストは又歴史的なキリスト・イエスであつた。現実世界の中で十字架に死に復活し給うた人の子キリストであつた。でないにヘレニズム世界に広く受入れられたロゴスの如く、又後にあらわれたキリスト化体説のグノーシス説の如く、パウロのキリスト、パウロの福音は歴史の裏付に立脚しない単なる思想と化してしまうおそれなしとしない。

然し事實はパウロの信仰は人の子として生きたナザレのイエス・キリスト、歴史に生きたキリストと固く結びついていた。行伝二〇章の「わたしは、あなたがたもこのように働いて、弱い者を助けなければならないこと、また『受けるよりは与える方が、さいわいである』と言われた主イエスの言葉」は聖書の中でパウロの遺訓によつてこの個所にのみ伝えられているが、それは又パウロの魂に深く刻まれて実践されたイエスの言葉であつた。

然もエルサレム教会は、この歴史のイエスの御生涯と十字架と復活を持つ特権を与えられた教会であつた。アジアの諸宗教の中で、パウロの福音が歴史の事実根ざして、迫害に堪えて伸展するためにも、同じく主イエス・キリストの中から生れた教会の兄弟を分裂せしめてはならない。これこそ歴史の流れを洞察しつゝ、福音の堅実な進展を願うパウロの深い祈りであつた。福音を伝えてローマとスペインを望みつゝ、ひとまず焦眉の急は東西分裂の回避である。エルサレムにのぼつたパウロの心情と行動は、このパウロの深い愛を知ることなくしては理解に苦しむものがある。

然も亦現にエルサレムの兄弟の中には其日の食に苦しむ人達がいたのである。この兄弟達にあたたかい手を差のべ、東西両教会を愛に於て一つに結びたい。迫害と、死を決してのエルサレムのぼりであつた。実にパウロの手紙を読む者は、そのいたるところに、この愛、打算と知らぬ愛を読む。ロマ書の九章を読む者は、如何に彼が血肉を領つた同胞に対して呻吟する愛の苦しみを味つたかを知るのであろう。

ましてエルサレムの母教会は主・キリストの血の中から生まれた兄弟達の教会であつた。「げに信仰と希望と愛とこの三つの者は限りなくのこらん、而して其のうち最も大なるは愛なり」コリントIの十三・13。

私達はパウロの書簡中、比較的軽しと思われたエルサレム教会員に対する愛の募金を通じて、実はパウロの全福音、全神学を支える主・キリストの愛にからめられた愛の実践生活、キリスト者の生き方を学ぶのである。

「これら一切のものの上に、愛を加えなさい。愛は、すべてを完全に結ぶ帯である」。

コロサイ書三章14節。

一九六六・十月。

(夏の横川聖書集会でのべた處を加筆してまとめたのであるが、あまりに永くなつたので記録にはその一部??のせて頂き、除外したのである)。

第五十八号 (1967年6月)

矢内原先生のお手紙

田中 獅熊

九月二三日朝六時三〇分、矢内原忠雄全集第二九巻を読もうとして四〇七頁をあけたとたんに、矢内原先生から大森さん宛のお手紙が真先に目につきました。

その中には水戸幼稚園や松本さんのこと等も活字になつていて、一瞬何とも云えない懐かしい気持ちがいたしました。

思えば昭和二九年六月二〇日大森さんがどのようにして矢内原先生にお手紙を差上げられたのか知る由もありませんが、そのご熱心の程は何となくわかるような気がいたします。

そのときからすでに一一年余りの戈月が流れ去つたのでありますが、その間神様は大森さんの内側に熱しつあつた心の扉をひらき、大森さんに強い信仰をお与えになつたばかりでなく、水戸の集会をお支えになり、集会の皆様の信仰の火は、益々燃えさかるばかりとなつたのであります。

そして毎週日曜日に、水戸幼稚園その他で信仰の先達として、水戸の集会を守る方々の熱心な聖書講解が続けられたのでありますが、その中には大森さんの名も加えられました。そのおかげでその後水戸の集会に加わつた私のみでなく多くの人達がどんなに力強く導かれたことであらうでしょうか。

尚いつでも、どこでも、誰に対しても主にある真実と愛を以て福音をのべ伝えて下さいました矢内原先生が、昭和二九年七月一日附で大森さんにおこたえ下さいましたお言葉は、今も、これからも当事の大森さんと同じような疑問や悩みをもっている人に対しても亦生きて働くものとなりましょう。

だから、矢内原先生は大森さんに対して主にある愛の手をさしのべられたのみでなく、その後続くものをも霊を以てお導き下さっているように思われます。

当事公私ともに文字通り繁忙を極め、大きな斗いの中にありながら、日曜の集会をもち、嘉信を発行し、各地に伝道し給う合間に、このように悩める者の問いに対しても一つ一つ誠意をこめて矢内原先生がご返事をお書きになつたということ、当事何の縁もなかつた私でさえも一一年余り後になって偶然之を知って大きな感動をうけたのでありますが、一見それは何でもない簡単なことのようになかなか実行できないことでもあります。

又そのように大森さんに対して矢内原先生がなし給うた一見何でもないように思われることが、実は大森さんを通じて水戸の地に立派な信仰の種子をまき、その後水戸

の集会に加わった人々の救いの力となったことを思えば、そのようにして神様が矢内原先生の手を動かして給うたものと信じます。

同じく、第二九卷三九四頁をみますと、愛媛県宇摩郡上山村の井藤道子様宛に、矢内原先生がお便りなさいました中に、「本当に我々の過去の奉仕も、犠牲も、労苦も、忍耐もすべて神のためであり、我々の為し得たすこしの仕事も神より出でた、神の力に由るのですから、讃美と感謝は神に帰せらるべきものです。??(」が抜けている)という言葉がございます。

まことにまことに神のみ業は奇しきかな、神のみ名はほむべきかなであります。

二六日の集会に出席できないと思いますので、このことを松本さん、大森さんに申上げてみたいと思って走り書いたしました。

昭和四十一年九月二四日

第五十九号 (1967年10月)

なし

第60号 (1967年12月) ??この号から号数が第60号というように漢数字ではなく英数字が使用されている??

なし

第61号 (1968年1月)

ヨナ書の勉強

宇野 輝

1. どんな書物であろうか

旧約聖書中、イエス様も愛読されたと思われるヨナ書とは、どのような書物であろうか。約十年計り前に少数の親しい方々と浅間山で開かれた夏の聖書集会でヨナ書の勉強をしたことがあった。その当事からのノートをもとめながら、今一度ヨナ書の勉強をしてみたいと思う。

註・ルカ福音書。十一章29-32節。

マタイ福音書。十二章38-42節。

はじめに、これは先輩の方々には大変失礼な言い分でお赦しを乞うが、私の拙い勉強ではじめてヨナ書を一緒に勉強して下さるの方々にお願ひする。どうか、まずヨナ書を読んでいただきたい。この機会にヨナ書の本文を再読、三読して下さるなら、それは私の拙い講解等に勝って、遙かに有益であり、又最も大切なことであると思う。

私の切にお願いするところである。殊にこのヨナ書は全体で僅かに四章(47節)の短い本文である。しかし読めば読む程、何と素晴らしい書物であるか、ヨナ書は。ここには神様と対話する活きた人間の姿があり、限りなく広い世界がある。陽の光に踊る地中海の波濤も、冬期に偏西風にあれる嵐もある。フェニキヤの船乗りがいきいきと描かれ、砂漠の子にとって空想豊かな大魚が泳ぐ。太陽の焼きつける古代世界の大都市であったニネウエと砂漠を吹くシロッコがある。そこに生きる民衆がある。人間の魂の機微が鮮かに浮彫りにされる。物語りは独創性に富み、又驚く計りにコスモポリタンである。しかも、ここに神様が私達の心の戸を敲いて、ソッと差出して下さる信仰の姿を映す鏡がある。

もしもこのような物語を日曜学校や幼稚園で子供達の心に種を播くなら、生命の核をもつ種子は、その豊かな空想性^{ファンタジー}を肥料として柔らかな子供達の心に根をおろして、何時かは実を結ぶ日があるであろう。

「旧約聖書の略註」の中で、私達のよき先達であられた藤本正高先生が、コルニルの言葉を引用されて次のように書いていらられる。「近代の優れた聖書学者であるコルニルは、“この書は人の書いたものの中、最も深く、最も壮大なものの一つである。私は少くともヨナ書を百回以上読んだが、この驚くべき書物を読む度に目に涙が浮かび、心臓が高鳴らなかったことは一度もない”」と。

それではこのようなヨナ書は簡単に言って、どういう書物かという、これは勿論史実の記録ではない。旧約聖書中の他の預言者のように、ヨナという預言者の語った預言集でもなければ、又ヨナという実在の預言者について書かれた書物でもない。

ヨナ書は紀元前四～五百年の頃、匿くれた一人のユダヤ人著者によって書かれ、その当時のユダヤ民族の偏狭過激な排他的民族主義、独断的選民思潮に対して反省を促すために書かれた物語りである。著書は著者の時代に燃え拡っていた偏狭過激な誤れる排他的選民思潮を憂えて、その反省を求めめるために、このようなヨナ書物語りを書いたのである。従ってヨナ書に描かれている預言者ヨナは実在の人物ではない。ヨナ書の書かれる動機となった歴史的背景については後に今一度のべるが、著者はこの物語に相応しい主人公に著者よりも約三百年位昔に北イスラエル王国に実在したと思われる一人の預言者であったアミツタイの子ヨナに借口している。物語の舞台も著者の時代思潮に似通った、その昔イスラエル民族にとっては忘れることのできない恐怖と憎悪的であったアッシリヤ帝国の首都ニネウエに移すことによって著者の時代思潮を風刺するに相応しい舞台とした。何故ならユダヤの同胞兄弟国であった北イスラエル王国は紀元前七二二年にアッシリヤに滅ぼされ、ニネウエの名はその敵国の首都として、ユダヤの同胞にとっては忘れ難い嫌憎の的であったのである。

従ってヨナ書はアッシリヤの滅亡(紀元前六一二年)と共に鉄のくびきからの自由解放を??歌したナホム書にはじまりヨエル書、オバテヤ書(歴史的背景は降下するがダニエル書等もこの系列に属する)に表われた異邦の圧政者に対する燃えるような憎悪の排外的民族主義の書物とは反対に、実に驚く計り抱擁的であり、“地とそれに充ちる凡てのもの”に及ぶ神様の豊かな御憐みは、独りユダヤ人のみならず、異邦人にも、又

彼等が敵視して憎んでいる民族に対しても、更に又その民族のもっている家畜にまでも及ぶ神様の愛の普遍性を説いた書物である。

ヨナ書の中心思想は四章の10～11節にある。神様の御慈しみの前には凡ての民族が平等であることを説いて同胞に反省を求めた驚くばかりコスモポリタンな書物である。

註・一。ヨナ書は思想的にはルツ記と同じ系列に属する物語である。これ等はいずれもエズラ・ネヘミヤの過激な宗教改革(B.C四五八)を歴史的背景として書かれたものと思われる。唯、ルツ記の方は物語の舞台を士師時代の平和な田園風景の中に採り、ユダヤ婦人の貞淑の鑑であるルツは異邦人モハブの女であったと文中に幾度か指摘して読者の注意を喚起している。そしてこの異邦人の女ルツからやがてユダヤ人の民族的英雄である信仰の人ダビデ王が生まれたことに言及して、神様が悦び給うて豊かな祝福を賜わるのは、敬虔な生活と広やかで隣人に奉仕する柔和な魂であって、独善的な選民意識や、隣人を劣等視する排外的な民族主義でない事をのべている。

註・二。無教会の人々は比較的に旧約聖書、殊に預言書を勉強すると言われるが、これは内村先生の影響ではないかと思う。その内村先生の約拿書講義が内村全集の第四巻の旧約研究の下に先生御自身の筆記で一九〇三年(明治三十六年)に発表されている。恐らく日本の旧約聖書の研究の黎明期に於ける貴重な文献であろうと思う。若き日、水産学を学ばれた先生が信仰の土台に立って、科学者の観察をもって、ヨナ書の講義をされていられるが非常に興味深い。カルビンの註解書の持っているような意義を帯びているものではないかと思う。

第62号 (1968年2月)

目覚めよ！日本

半田 梅雄

この世に多くの神がある。それらのすべての神に向って、私たちはこれを偶像と呼び、迷信の神と呼ぶ。神はただ御一人のみ、キリスト・イエスを通して示された神のみが、真の神であり、この御方こそ天地万物の創造主にして、その支配者で在り給うことを私たちは信ずる。

では、「真の神」と「偽りの神」はどのようにして見分けられるか。簡単な鑑別法を紹介したい。先ず「偽りの神」であるが、その最大の特徴は、「人間の利益に奉仕する神」であることである。従って「真実の神」は、その反対であるといつてさしつかえない。

日本の神々の特徴は、家内安全、商売繁昌、五穀豊饒をもたらす神である。最近は、武運長久の神が交通安全の神、試験合格の神に商売変えた話も聞く。病気を治してくれる神、入学試験にパスさせてくれる神、神さまもさぞ忙しいことであろう。

このように、人間の利己主義に奉仕することを強要され、結果がよければ靈験あらたかな神、御利益豊かな神としてほめそやされ、立派なお宮や鳥居を作ってもらえる。

そんな人間の御都合主義に甘んずる神がどうして「神」の名に値しよう。これこそ、頭のよい商売人の考え出した偶像に外ならないではないか。

神が真に神であり給うのは、人間の欲望や意志に関係なく、真実公正にして義なるお方であるからである。アメリカ人は守るが、中国人は全然かえりみない神、そんな不公平な神があるはずがない。日本人にはもうけさしてくれるが、ベトナム人には貧困と悲惨な戦争を与えるような不義なお方は神ではない。

たとえ、自ら選び給いし民といえど、不義があれば徹底的にこらしめ給う神、イスラエルの義人、予言者たちは、そのような義の神に押し出されて、おのれの同胞に、激しい叱咤をあげたのである。

わずか十年や二十年の繁栄や太平で、「義の神」を甘く見くびってはならない。

日本が、今日の繁栄にあるのは、御都合主義の神、御利益を与える神のもたらしたものであると思うのは、大間違いである。朝鮮特需、ベトナム特需でぬくぬくともうけて来た民に、どうして「義の神」の鉄槌が下されぬはずがあるろうか。

二～三発の水爆で、全国土焼野原になり得る小国日本、十万や二十万の軍隊によって、終極的な戦争の惨禍を防ぎ得ると考える愚かな為政者を持つ島国日本、鎧の上に衣を来た偽平和論者に禍あれ！

祖国よ目覚めよ！今こそ義の神の前に襟を正し、百年、千年、否、永遠の平和のために日本よ目覚めよ！同胞よ目覚めよ！

第63号（1968年4月）

なし

第64号（1968年7月）

私たちは神の子である

—ヨハネの第一の手紙三章一節—

半田 梅雄

罪人が神の子と呼ばれるためには、二つの方法がある。一つは、人間が神の子たるの資格を持つこと。もう一つは、神が罪人の罪を赦して、子と認めてくれること。

第一の方法は、歴史始まって以来、人間が目ざし、努力して来た道である。刻苦修業、奮励努力して、心にこだわり、わだかまりなき状態、すなわち人格の完成を求めた人は数え切れまい。

人間が、努力によって、ある程度の正しさを得るのは事実である。しかし、それはどこまでも程度の問題であって、絶対善、絶対義に到達し得ないことも事実である。

第二の方法は、キリスト・イエスの十字架の死によって、神が、我ら罪人の罪を赦し、子として愛し、導いて下さるとの信仰である。

そんなバカな！という人はあろう。一人のナザレ人イエスによって、全人類の罪が

赦されるという。普通誰もが感ずる当然の疑問である。

しかし、このことが合理的であるか否か別問題として、この信仰が一たび与えられるや、従来の苦悩が、一ぺんに消し飛んだ事例を、私たちは限りなく知っている。古くはルター、バンヤン、ミルトン、近くはシュヴァイツァー博士、キング牧師、身近くは内村鑑三、矢内原忠雄みな然りである。

論より証拠である。私たちのようなつまらぬ者まで、この神の大なる愛の恩恵に浴している。我が靈魂のうちに起った変化の不思議さを語るときに、私たちは大いなる喜びを感じ、この恩恵の事実を少しでも多くの人々におすそ分けしたき欲望を禁じ得ない。「私たちは、すでに神の子なのである」と、ヨハネはいう。この一語のなんと歓喜と希望と勇氣に満ちていることよ！これに比べて地球も軽い感じがする。

第65号（1968年10月）

キリスト者の求めるもの
—ヨハネ第一書三章一節—

“世がわたしたちを知らないのは、父を知らなかったからである。”

一般社会、殊に日本の社会の全体的傾向は、キリスト者を真に理解しない。

その誤りのもっとも大きいのは、キリスト者を、道徳的な完全者と考え、一つの理想像を画いて、これによって律し、評価することである。俗な言葉で恐縮だが、「虫も殺さず、へもひらぬ」**??**の人間が、クリスチャンの典型だと思っている人が意外と多い。謹厳居士、糞真面目な禁欲主義者として行動することが、クリスチャンのすべてだと思っているらしい。たしかに禁欲と宗教は無関係ではない。事実、ほんもののクリスチャンは共通に禁欲的である。しかし、禁欲は結果であって、キリスト者の目的は、禁欲家になることではない。極端な例をあげれば、煙草一本を吸い、酒を一杯呑めば、クリスチャンでなくなるなどナンセンスである。しかし、だからといって、毎夜酒によって人生の楽しみを味わうほかに術のないような者は、もはやクリスチャンではない。

キリスト者たる者は、また、キリスト者たろうとする者は、共通に、真実を、正義を、公平を、同情を、愛を求めるものである。

真理と道義と、愛と公平を、自らにはもちろん、社会、国家、いな全世界に行なわれんことを求めないものは、神の子の資格を持たないのである。

私たちは、これらを自らに求め、世に求めて失望した。人は、正義を口にして、自らこれを行ない得ない。生れながらの人間は、神から離れたものである。おのれの利益に奉仕することに喜びを見出すようにできている。どんなに磨いても、黒い石炭を白くすることはできない。

正しき方は、神御一人のみ。いままで、漠然と考えていた正義とか、良心とかいうものが、イスラエル民族を通して示された、正義の神の真実にふれて、愕然とする。神は、抽象的な観念の世界の産物でもなければ、神話の中の死んだ映像でもない。人

間の歴史と直結しておられ、生ける人格として個人にも民族にも、国家にも、世界にも生きて働きかけ給う御方であることを私たちは知る。小さな合理主義、受け売りの科学知識で否定し去ることのできない厳たる事実がそこにはある。

イエス・キリストにおいて、私たちが見るものは、透徹せる真理の眼と、一さいの不義と邪悪を超越し、しかもこれを抱擁し、赦すところの無限の愛である。そしてこの両者を、有限のこの世界において、生ける一人の人格としてあらわされた。イエスを仰ぐことによって、永遠の生命の実体を私たちは知る。

彼によって、私たちは、絶対善、絶対義、絶対愛なる唯一者を知るのである。

私たちは、イエス・キリストを通して、この唯一者の懐に安らい、憩い、限りない励ましと慰め、夢と希望を受けとる。不可知の世界も可知され、不可能も可能とされる。こうしてついには、死と生とが一つラインに連結されるのである。このラインこそ永遠の生命であり、生命の無限光である。

有限の此方から、無限の彼方へ、私たちはもはや一時の世界に生きる者とクビキを共にすることができない。

世と世にあるものとは遂に滅びる。しかし、唯一者は永遠に在し給う。

どうして有限のものが、無限のものを裁くことができようか。(半田)

(四三、五、四 土曜会にて語しもの)

第66号 (1969年2月)

なし

第67号 (1969年8月)

ヨナ書の勉強(七)

—神様の愛—民族主義の垣をこえて

宇野 輝

第四章はヨナの怒りと神様の訓誡である。ヨナにとっては、神様のなさり方は、自分の気に喰わぬなさり方であった。ヨナはニネウエの人々の悔改めを神様と共に悦ぶことができなかつた。彼は神様に、さんざん苦勞させられて、あげくの果にだまされたと感じた。

ヨナの信仰はいつのまにか神様の自由な御意志と離れて自己中心的な信仰になっていた。自分の気持や願いや意志を神様に押しつけていた。仇敵ニネウエの民への審判の予言が的中して快哉を叫びたい、或はもっと言うと、我が名があがる心理＝そこにはもはや深い愛はなかつた。広い心はなかつた。今やヨナには予言者に最も大切な「いやしき僕、なすべきことをなしたるのみ」ルカ十七・10の謙虚な心が失なわれていた。

そこでヨナは激しく怒り、神様にむかって不満をぶちまけたのである。

著者はこのような場合に誤りを犯し易い人間の心理を実に巧に捕えている。

2節「主よ、私がお国におりました時、このことを申したではありませんか、それでこそ私は、急いでタルシシにのがれようとしたのです。なぜなら、わたしはあなたが恵み深い神、あわれみあり、怒ることおそく、いつくしみ豊かで、災を思いかえされることを、知っていたからです。」

チャーンと私は、あなたのみ心を見抜いていたからこそ、あのようにタルシシに逃げようとしたのです。それなのにその私をつかまえてひどい目にあわせて、その上あんなにまでして宣べよと言われた警告の予言は何一つあたりません。私は敵の都のまん中で赤恥を搔かされて面目丸つぶれです。ヨナは神様に向って、かって自分の不信仰の故に犯した過ちを、今や神様に責任転化のこごつけにしている。

今も昔も変らぬ偽り多い人間心理の弱点を突いた描写である。そしてこのようなヨナの言葉の裏には、矢張り憎いアッシリヤの首府ニネウエが自分の予言により天罰を被って覆滅してしまえばよい、快哉を叫び、溜飲をさげたいと願う当事のユダヤ人全体の排外的気持を代表している。

4章3「それで主よ、どうぞ今わたしの命をとってください。私にとっては、生きるよりも死ぬ方がまだからです」。

「喉元すぐれば熱さ忘れる」と言うが、怒って、すねて、ひねくれて、且ては海の中から「神様どうぞ救ってください、助けてください」と祈った事も忘れて、神様に対してふくれ面をしているヨナの姿である。

しかもこのヨナに対する神様のあしらい方の中に、実に優れた人間心理の洞察者としての著者の筆が窺われる。もしも此物語りが、神様がヨナの不遜な態度を怒られて、厳罰にし給う結果に終るなら??勿論それも当然ではあるが??この物語りは著者の同胞であるユダヤ人の心に受入れられなかったであろう。

反感を招くことはあっても、ああ成程そうであったのかと納得され、染みこんでゆかなかったであろう。ところが神様は、白い眼を剥いてすねているヨナを、ヤンワリと受けて立って、「ヨナよ、おまえの怒るのはよいことであろうか」となだめながら砂漠地方の燃える太陽の暑さから、ヨナの苦痛を救ってやるために陽除けになるとうごまを備えて、それを育てて、ヨナの頭の上に日蔭を作っておやりになったというのである。するとヨナは、すねた子供が、父なる神様からおもちゃを与えられたように機嫌を直して、6節後半「ヨナはこのとうごまを非常に喜んだ」。

註・とうごまと言うのは古い文語訳では、「ひさご」となっている。新しい訳の方が正しいとのことであるが、私達にはピンとくるひさごに似た植物とのことである。近東地方一般に油を採るために栽培される葉の大きな植物で、極めて速く成長するが虫に弱く枯れることも早いとのことである。

ところがヨナの喜びは実に儂いものであった。「神様は翌日の夜明けに虫を備えて、そのとうごまを嘯ませられたので、それは忽ち枯れてしまった」。「やがて太陽が出たとき、神様は暑い砂漠の熱風(東風)を送り、又太陽がヨナの頭を照したので、ヨナは弱り果てて、死ぬことを願って言った、「生きるよりも死ぬ方がわたしにはまだ」

と。

実に自己中心にのみしか物事を考え得なかったヨナ(実はヨナによって代表される著者の同胞であるユダヤ人であるが)には、とうごまが見えて、罪を悔改めた幾十万のニネウエの人々が見えなかったのである。まして、憐み深い神様のみ心などは解らなかつた。

先にはニネウエが自分の思い通りに滅びなかつたので死んだほうがまだ、と言つたヨナは、今度は僅かに一本のとうごまが枯れて日蔭がなくなつたので死を願う。これが自己中心に生きる人間の姿である。そして又著者の愛するユダヤ人同胞の現実の姿であることを暗示している。民族主義的ナショナリズムが又屢々此あやまちを犯すのである。そしてこの物語りは暗示の豊かな終結に導かれる。

9節「しかし神様はヨナに言われた、「とうごまのためにあなたの怒るのはよくない」。ヨナは言った、「わたしは怒りのあまり狂い死にそうです」。

10節、主は言われた、「あなたは勞せず、育てず、一夜に生じて、一夜に滅びたこのとうごまをさえ、惜しんでいる。11節、ましてわたしは十二万あまりの、右左をわきまえない人々と、あまたの家畜のいるこの大きな町ニネウベを、惜しまないでいられようか」。

物語はプツリと切られている。しかしこの四章11節こそ著者がヨナ物語を通して愛する同胞に訴えようとした話の中心である。反省を求めた愛である。著者は物語りを通じて愛する同胞に神様の普遍的な愛を語る。

ネヘミヤの宗教改革に伴って起きたさまざまな矛盾と悲慘に対して、当事のユダヤ人、ことに改革の中心に立つ人々の抱いていた偏狭過激な排他的民族主義、誤つた選民意識とメシヤ感を排して、民族のかきねを越えた神様の愛を説いている。神様は御自ら創り給うた全世界の、彼等が敵と思うアッシリヤのニネウエの民をも、否、その家畜迄も憐んで滅びることを望み給わないことを物語る。ニネウエの民を慈しみ給うた神様が、どうしてサマリヤ人を、モハブ人を、アンモン人を慈しみ給わぬことがあろうか。神様の愛のもとには四海同胞。しかも著者は物語を通じて、世界の選民を以て誇る同胞の信仰が、実は選ばれた僕ヨナのように幾度も過ちを犯すものであることを指摘する。ここにも又この無名の予言者の優れた神観が窺われる。

排他的民族主義は実は利己主義の集束拡大なのである。平和と和解は常に己を殺して相手に仕えてゆく中からのみ生れるのである。私達がヨナ書を読むとき、アモス、イザヤ、エレミヤ等個性の強い予言者が時代の大濤に抗して??立する姿をみることはできない。然し遙かなる天の御座から見おろす人の子の低く賤しく偽多く等しく失敗を繰返す姿をヨナに於てみるのである。そして「世の人は如何なるものなれば、これを聖念みこころにとめ給うや。人の子は如何なるものなれば、これを顧み給うや。只少しく人を神よりも卑しくして、栄と尊貴とうとぎとをからぶらせ」て下さる愛の神様のみ心を学ぶのである。(詩・八)独りあわれみあり、怒ること遅く、御いつくしみ豊かで、人間の悔改めをこよなく悦び給う父なる神様が解るのである。

新約時代になって尚、コリント人への第一の手紙三章6・7節に「私は植え、アポロ

は水を注いだ。しかし成長させてくださるのは、神である。だから、植える者も、水を注ぐ者も、共に取るに足りない。大事なのは、成長させて下さる神のみである」。と語ったとき、凡そ自然を語ることの珍しいパウロの心に、ヨナ書の神様が映ったのではあるまいか。

ヨナ書は今から二千四百年も昔に書かれた古い古い書物である。しかしヨナ書の著者が問題とした問題—民族主義とナショナリズムの問題、恩恵により選ばれた者の自覚と使命等、今日尚私達に問いかけて生きている問題である。否、更に今日程私達が世界と人類の危機を真剣に憂え、その根本原因を深く掘りさげて、自らの内側に内蔵する憎しみの問題、罪の問題、不信反逆の問題。第一に神様との悔改めと赦しと和解の問題、そして人類が自ら招く審判の破局からの回避を真剣に祈って取組まねばならぬ危機はないと思う。ことに最近のソ連のチェコ暴圧に今更の如く大国の勢力のバランスの上に置かれた水爆の平和などというものが怖るべき人類の破滅に隣する錯誤であるかを慄然とした思いで視るのである。ヨナ書はその問題の解決にとり組んだ書物である。

私の敬愛する東京の独立・蓮沼教会の村瀬牧師が(氏は健国記念日、二月十一日設定の公聴会に於ても反対の立場から証言台に立たれた方であるが)日本の旧き指導者層の唱導する明治百年の声の底に流れるものに対して、「明治は八十年を以て断絶した歴史である」とその教会月報で戦の矢を放ってられる。

神様に大斧を振われて、あの苦悩の中で、三百十万の血涙の祈と、一億総懺悔の灰の中から赦されて新たに生れ変わったはずの祖国日本ではなかったか。その日本も又再び大—きな断罪の道への旋回点に立っている今日、私達は今一度古き聖書の指し示す道に学ぶ必要があると信じる。

神様を信じる五十人。四十人。三十人。二十人の人々の真剣な祈りが祖国と世界を支えるのである。

一九六八・九・四

ベトナムに続くソ連のチェコ暴圧の日日。

第68号 (1969年12月)

手紙

諏訪 熊太郎

御丁寧な新年御賀状ありがとうございます。

病弱の私も今度八十の新春を迎え驚嘆感謝致して居ります。次に過日古い物を整理して居りました時に先年羽黒山で話した時の原稿に目が止まり、どんな事だったかと読んで見たところ、今日の私の信仰そっくりであり、且つ自分の信仰というものをこれほど纏めて話した事もなかったもので、価値の有無は別として、ともかく自分の記念品としてはよい物と思われました次第、それで閑暇にまかせて清書をしましたので、一部同封申上げます。御ひまの時に御笑覧頂ければ幸甚に存じます。

主の御恵み貴家に豊かに加えられますよう御祈り申上げます。

一月十四日
(半田梅雄あて)

第69号 (1973年12月)

聖なるかな 聖なるかな 聖なるかな
半田 梅雄

キリスト教の経典を「聖書」という。「聖」なる書は必ずしもキリスト教の専売ではないと思われるのに、「聖書」といえばキリスト教の独占語となっている。それはともかく、キリスト教に何の知識のないものでも、一度聖書を開いて見れば、「聖」なる文字が、無数にあることを知る。聖安息日、聖予言者、聖都、聖書、聖所、聖徒、聖霊等々。さらに聖書をよく読めば、単なる文字、誇張した形容詞として「聖」の字が用いられているのではなく、キリスト教の根本思想が、「聖」なる文字にこめられていることがわかる。

すなわち聖書全体を一言でいえば、「聖なるもの」であり給う神と、「聖ならざるもの」である人間との徹底的なる対比であることに気がつく。しかも、単なる対比に終ることなく、聖ならざる人間が、聖なる神によって、完全に潔くして頂けることを明らかにするのが、聖書の説く根本的原理であることがわかる。

古来、日本の思想には、類似の「清」はあるが、徹底した「聖」はないように思う。「みそぎはらい」をして清潔になることは日本人の願望であるが、聖ならざる罪のおのれを徹底的に否定し、聖なる唯一神に一さいをゆだねることによって、全く新しき生、すなわち永遠の生命に至る悔い改めはない。キリスト教では、これを回心という。本源的なものへの回帰は、一度大なる自己否定(即人間主義否定)によって、始めて可能なことを意味している。

ヨハネの黙示録四の八にいう。

「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、全能者にして主なる神。

昔いまし、今いまし、やがてきたるべき者」と。

従来、讚美歌六六番によって、余りにも安易に、日常の挨拶のように慣れ親しんで来たこの「聖なるかな」の一語に、キリスト教の根本的原理がすえられていることに、いまさらのごとく眼を見はる思いである。

「聖」なる文字の中に、キリスト教の中心がある。「聖なる神」を知ることが、すべての始めであり終りである。ほかの何を知るよりもその一事を知ることですべてがこと足りるといってよいのである。

事業を成功させてくれる神、金をもうけさせてくれる神、試験に合格させてくれる神、病気を治してくれる神、交通事故から身の安全を守ってくれる神、よき子を授けてくれる神、戦争を勝たせてくれる神、世のすべての神は、このように我利に奉仕してくれる神である。この神の前に、人は大いに寄附金を惜しまない。そのはずである。これらの神は、小なる投資で、大なる利益をもたらしてくれるからである。

キリスト教の神は、これら我利に奉仕する神と根本的に違う。生まれながらに我欲

の子である私達の眼のうろこを取り除き、実に聖なる霊(魂)の世界へ私達を教え導くところの神である。霊といい、魂といって、私達に霞を食って生きよという神ではない。わたしたちの物質的、精神的生活の一さいを、必要に応じて満たしつつ、聖なる神の国へわたしたちを引き上げ給うところの神である。

「神を知る」「聖なる神を知る」これより大なる事業はこの世にはない。わたしたちの生涯にとってこれより大なる事業はこの世にはない。これ以上の大発見もこの世にはない。

人なるイエスが、荒野の誘惑において、完べきに発見したのがこの神であった。彼の苦難と屈辱に満ちた公生涯の終り、ゲッセマネの園での祈り、さらにあの十字架上で発した「父よ、わたしの霊をみ手にゆだねます」の従順にして壮烈な一語に、聖なる神のみ国が、永遠の光に輝くのを見る。

ああ、聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな。聖なるみ霊によりて生かされる生涯のなんとよろこばしきことか。パウロもいう。だれが、キリストの愛からわたしたちを離れさせるのか。患難か、苦悩か、迫害か、飢えか、裸か、危難か、剣か。いな、わたしたちを愛して下さったかたによって、わたしたちは、これらすべてのことに勝ち得て余りがある。――と。

人の本性は、元来本質的に聖なるものを望む。ただ、人は余りにも弱い。眼前の利害からどうしても眼をそらすことができない。そのために聖書を手にしつつ「聖なる」文字の意味と絶大なる価値に気がつかない。「すべての人は迷い出て、ことごとく無益なものになっている」とパウロが指摘するとおりである。

聖書を開くことは、聖なる神のみ前にひざまずくことから始まる。「聖」を求めぬ人に聖書は意味なき古本に過ぎない。「神聖な物を犬にやるな」とイエスもいい給う。また「もつめれば与えられる」ともいい給う。然り、「聖なるもの」を求めよ、されば必ずすべてが与えられるであろう。そうでないものは必ずすべてを失うのである。

第70号 (1974年3月)

苦難をも喜ぶ

人は、平和や幸福を望み歓迎するが、患難や苦難は、極力これを避け嫌う。ところが、キリスト者パウロは、「患難をも喜ぶ」(ロマ五、三)という。不思議な人間である。彼は、人並でない、変人、へそ曲がりの一人に過ぎないかという、決してそうでない。彼は、当事のユダヤ国において、最高の学問を身につけ、先祖たちの言い伝えを、最も忠実熱心に実行する極めてノーマルな神士であった。その彼が、一度キリストに導かれるや、全国人の反対を受け、激しい迫害にあっても少しもひるむことなく、完全として福音宣伝の先頭に立って闘う人となったのである。彼にとって、福音の故に患難を受けることは、喜びであり、誇りであった。これがキリスト教の本質であり、幾たびかの歴史的危機を乗り越えて来た“偉大な力”の秘密であった。

いかなる患難をも、喜んで迎えるものに、もはや、患難は、圧力でも、壁でも、絶望でもない。患難のさいはてなる「死」すら問題ではない。イエス・キリストの十字

架と復活によって、この、世にも不思議な力が、信ずるすべての人に与えられる。患難を越えたき人は、“来りて見よ”である。

第71号（1974年5月）

キリスト者の戦い

戦いに種々ある。肉体、武器、策略、経済その他いろいろな方法と手段もつてする戦いがある。これらの戦いに、共通するものが二つある。その一つは、「戦いの目的が、自己又は自己の属する集団の利益にあること」、その二は、「戦いの原理が優勝劣敗にあること」である。“弱肉は強口に食われる。”

これが、この世における戦いの普遍的原理である。

これらの戦いと明確に目的を異にし、原理を異にする戦いがある。この戦いは、地上における自己の利益を目的としない。競争相手を倒して、自らが支配の座に着くことを欲しない。勝つことではなく、むしろ敗れることをいさぎよしとする。その世界では、尊ばれるのは強者ではなくして弱者である。実に世にも不思議な戦いである。

しかし、不思議ではあるが、この戦いはたしかに世に実在する。いや、過去に実在し、現に戦われ、未来も永遠に消え失せることはないであろう。聖書を見よ！キリスト・イエスの生涯は、まさしくこの戦いの連続であった。キリストに生きるものは、彼と共に黙々と十字架の道を歩みつつ、永遠の勝利の栄光に包まれる日を確信するのである。(半田)

第72号（1974年7月）

罪の赦し

人は、誤って足を踏まれた場合でも、相手が直ちにあやまらないときは非常に怒る。故意に、又は策畧をもって自己が傷つけられ、陥れられた場合は、それこそ怒心頭に発して、身の置き所に苦しむ程である。それ程に人を赦すことは難しい。

何故人は他人を赦すことができないか。それは自己保全、自己の利益を守ることが決定的に大切だからである。この世は、自己と、自己の利益との関連においてのみ価値があり、これを除いて地球上の一さいは無益、無用の存在となる。

しかるに、イエスは教え給う。「敵を愛せよ。自分を迫害する者のために祈れ。」(マタイ五の四四)と。さらに、イエス御自身は、敵の嘲笑と策畧を一さい御承知の上で、十字架上に処刑を受けられ、なお、その十字架上で、「お父様、あの人たちを赦してやってください。何をしているか知らずにいるのです。」(ルカ二三の三四)と、とりなし給うたのである。あゝ十字架上の罪の赦しと、とりなし、これを除いて、聖なる神のみ前に、われらが出られる方法が、一体どこにあるというのだろうか。(半田)

第73号 (1974年11月)

テサロニケ人への第一の手紙の勉強(四)

宇野 輝

(五) エルサレム集会(教団)の内容と推移

ユダヤ教徒が五旬節(ペンテコステ)を、民族宗教の礎石となったモーゼのシナイ山における律法授与の記念祭日とした如く、ペンテコステの聖霊降下(行伝二章)は、エルサレムにはじまるキリスト教徒の霊的新生の起点となった。復活の事実も、更に十字架の意味も、この起点から見返された信仰である。

註、ペンテコステは第五〇の意味。過越の大祭より五〇日日出エ記三四・22には「七週の節筵—ななまわりのいわい—」典。出エ記二三・16には「かりいれのいわい—」典。出エ記十九・1にシナイ律法発布記念日とする。元来は農産物(ことに小麦)の収穫感謝祭であり、後に砂漠時代の宗教的意識を附加したものであろう。唯、ユダヤ教的意味と、キリスト教的意味を対置してみると、意味深いのに気付く。

エジプトに於ける民族的苦難—過越の恙の贖罪—出エジプトと紅海渡渉(絶望の死からの救出)—シナイのモーゼ律法の授与(民族宗教の礎石)。

キリストの十字架受難—神の恙の贖罪—死よりの復活—聖霊による新生(世界人類の救の礎石)。いずれも恩恵の後に使命がある。そして、いずれもメシヤの再臨信仰をもつ。

イエス様の受難により、迫害の波及を怖れて四散していた弟子達(十一使徒に限らず、沢山の弟子達=ルカ十・1=70人)は、彼等の心に刻まれた御生前のイエス様の鮮かな個性、追いもとめてやまない、その潔い兄弟愛、深い祈、困苦にめげない高い情熱、一人一人の魂を引付けて離さない高貴な??ある人格の力、その人格の刻印を胸に、慕い奉る我が師イエス様として、二人、三人とエルサレムの兄弟の家に寄り集ったのであろう。その家は最後の晩餐の行われた、マリヤとヨハネ・マルコ(マルコ福音書の著者)の家であったかも知れぬ。五旬節は過越の祭と共に、海外離散のユダヤ人達が、多く神の家エルサレムに参集した。そしてイエス様を愛慕し、復活の奇蹟に不思議な感動を覚えていた弟子達の魂は、おぼろげなメシヤ・イエス来臨の期待を抱いていたかと思う。それはまさに乾き切った祭壇の薪に油が豊かに注がれた状態であったと思う。聖霊降下は、五旬節中のイエス様の復活を覚える聖日の朝の九時、宮の境内で心をあわせて祈禱中に(神殿の祈り時間)=ブルース・行伝=突如、霊火が彼等の魂を根底から焼き尽くした。古来のイスラエル宗教に於いて、火は主の御臨在しるしの徴である(出エ記三・3。十三・21。イザヤ六・6。ルカ十二・49。へブル十二・29。)炎の舌状は、パウロの場合よりも更に原始的エクスタシーな状況であるが、彼等は霊に酔

い「旧きは既に過ぎ去り、視よ！新しく」されたのであろう。生けるキリスト・イエスが彼等が臨み、彼等の活発な活動の原動力となったのであろう。

註、信仰に或転機はある。然しペンテコステの聖霊降りは特殊なケースである。然も人為的ではない点に注意を要する。

しかし信仰の生きて活動する所は又、サタンの狙う強襲点でもある。不思議に思うことは、彼等のうちでも、ヘレニスト(海外からの)ユダヤ人が、この霊火を最も豊かに受け容れたのではないかと思われることである。そして、リベルテンのユダヤ教徒や、サンヘドリンの攻撃の焦点も彼らにあわせられる。エルサレム集会の分解も、古き皮袋を破る生命として溢れでて(迫害により四散するヘレニスト達)、そこから始まるのである。私は、エルサレム集会は、時の経過と共に自づと三つのグループに大別されて移り変っていったのではないかと思う。第一は、ステパノを中心とするヘレニスト達のグループ。その二は、ペテロ・ヨハネ等の使徒達を中心とした、イエス様の御生前からの弟子達のグループ。その三は、イエス様の十字架後、ことにペンテコステ後多数入会した人々のグループであって、この人々は、聖霊による明確な回心意識なしに、エルサレム集会を、イエスという一予言者によつてはじめられたユダヤ教の新興一宗派位に考えて、その信仰内容に、霊、天使、メシヤ来臨と最後の審判、義人の復活、神の国等を信じた、律法に熱心で真面目なパリサイ派から帰依したグループである(行伝十五・5)。彼等は御生前のイエス様が、腐敗した神殿宗教の俗化、形骸化に鋭い警告を発し、なわの鞭(予言者の行動)をおつて、宮潔めをなし、昔の予言者の如く、宗教の特権階級と衝突して、殉教の死をとげられたものとして、共鳴を感じたのかも知れぬ。

註、キリストの顕現について

コリントI・十五・5、6。尚、信者数の行伝二・41、三千人。四・4五千人は少しく過大に思う。

初期エルサレム集会内に、人数に於いても、信仰に於いても相当の勢力を占めたとされる海外ユダヤ教徒から帰依したヘレニスト達が(或は彼等は、ローマからの解放奴隷ユダヤ人、即ち「リベルテン」会堂所属の分離信徒達であろうか?)どのようにして、エルサレム集会に加入していったか？或はその一部の人々はイエス様の御生前から従っていたのであるか？浅学の私には解らない。唯、然し、既に遠いエレミヤの言葉に

「私は近くにいる神であろうか、むしろ遠くにいる神ではないか」—とヤハウエは言われる。

「わたしは天地に満つるものではないか」

とヤハウエは言われる—。

エレ・二三・23、24B(関根先生訳)

又、エレミヤもエゼキエルも、「心の割礼」を宣べて信仰の形骸化を警告している。イスラエルの歴史に於いて、国は亡び、エルサレム神殿は破壊され、民の優秀分子は凡て捕えられてのバビロン捕囚の経験は(この場合に、北イスラエルの場合と異なり、

法典、予言者の言葉が文書化して伝えられていたことは大切な要因であると思うが)多くの古代東方宗教に触れて、その神観、信仰、祭儀共に、みのり豊かな収穫をもたらした。律法、予言書の編纂もこの期になされた。

丁度そのように、多くの離散(ディアスポラ)のユダヤ人が、ヘレニズム世界の諸都市に住み、オリエントの多くの宗教の潮流の中で揉まれつつ(オリエント宗教の神秘主義(秘義-奥義)、後期ギリシヤ哲学、やがてグノーシス思想等)会堂で祭儀宗教でなしに、正典(聖書)による文字の宗教を守って来たということ。そのことが、自づと、広い視野をもつヘレニスト・ユダヤ人達(殊に後のタルソのパウロの如きヘレニスト)が、ギリシヤ語で読む聖書から受ける影響と共に、キリスト教の思想的発展に豊かな内容をもちこんだと考えるのである。

「わたしは天地に満つる」神、ローマ帝国内のいたる所のシナゴグで、安息日毎に正典で語りかける神。この点で、エルサレムの神殿祭儀宗教と、その権力に強く支配されたパレスチナの(特にユダヤの)保守的信仰と異なるものがあつたと考える。彼等は隣人サマリヤ人と交らず、「異邦人のガリラヤ」と軽蔑したのである。(マタイ・四・15)。

註、パウロの思想の中に東方宗教の神秘主義の影響(コリントI三・2。一乳。II・五・4。コロサイ・二・11。三・9。一脱ぐ)一異邦人に解り易く説明するために引用した一の言葉や、ギリシヤの詩人クレアンテス(BC三〇〇頃)の詩句を引用(行伝十七・28)している。グノーシスに対する警告はコロサイ二・8等。しかし、ヘブライ思想の根幹はゆるがない。ヤハウエとキリストを混同することはない。又パウロは当事のユダヤのラビ達の譬喩的(アレゴリカル)な解釈法を多く用いている(コリントI・九・1。十・1-4。II・三・12-14等)。

但し凡てのヘレニスト・ユダヤ人達が、広い視野と自由な見解をもつたということではなく、海外異教徒の中で強く生きるユダヤ人達が強い民族主義、排他思想、律法主義、シオニスト達が多くいたことは自然である。パウロの迫害や、屢々命が狙われた事でも解る。とも角、エルサレム集会の中でいろわけしてみた三つのグループのうち、イエス・キリストの十字架の意味するものを、最も鋭く、自由な角度から把握して、活発に活動したのは、ステパノを中心とするピリポ等七人の執事とバルナバも含むヘレニスト・グループであつた。

行伝六章1-6の記事は、彼等の集会内に於ける活発な活動、革新的意見等が、自然と発言権に反映して、ささいな「日日の配給」や「食事のこと」に端を発して、伝統に束縛される信仰の人々と摩擦を起したものと思われる。しかも7節には「こうして神の言は、ますますひろまり、エルサレムにおける弟子の数が、非常にふえていき、祭司たちも多数、信仰を受け入れるようになった。」の一句は注目に価する。勿論、祭司のうちにはザカリヤ(ルカー・8)のような敬虔な下級祭司もいたではあろうが。

そして、この新しい勢力を抑圧することは、反ってエルサレム集会の分裂につらなる様相となつていたのではなからうか。事実、食事のことで選ばれた彼等七人は、す

べてギリシヤ名をもつヘレニスト達で、しかも食事のことを扱うような人々ではなく、有力な伝道活動家達であったと思われる。「執事」という語は、後の教会からの反映で、教会の財務管理者。唯、調和的なルカの筆が、エルサレムの使徒職優先の按手礼(六・6B)にもみられる。彼等ヘレニスト達の筆頭はステパノで、「信仰」と聖霊に満ちた人」であり、「ステパノは恵みと力とに満ちて、民衆の中で、めざましい奇跡としるしを行っていた。」と。恐らくこのステパノが旺盛な伝道心に燃えて、海外ヘレニスト・ユダヤ人達の会堂(「リベルテン」の会堂に属する人々、クレネ人、アレキサンドリヤ人、キリキヤやアジアからきた人々など)で福音の証の論戦を挑んだのであろう。

註、「アジア」は小アジアのローマ行政州。パウロの出身地タルソはキリキヤにある。但し、ステパノとパウロとの出会いはあり得ること。私には断定はできない。七人の一人であるアンテオケのニコラオは異邦人の改宗者であった。改宗者とは正規の割礼を受けて、ユダヤ教に帰依しユダヤ人の民籍を与えられた異邦人。

伝統を守る神殿宗教の保守勢力は、自己防衛の本能的直覚で、自分達に最も危険な敵が誰であるかを知る。「知恵と御霊とで語る」ステパノに対して「リベルテン」の会堂に属する人々は到底対抗できなかった。

彼等はステパノの論鋒に怒りに燃えた。私達は彼等が最高宗教法院(サンヘドリン)に告訴する証言の中に、確かにステパノが述べたであろう論旨の半面を認めうる。反対者の側の耳には「わたしたちは、彼がモーセと神とを汚す言葉を吐くのを聞いた」であろう。又議会に立てた証人にしても、「偽りの証人たち」という言葉は、キリスト教側からの言葉で、「この人は、この聖所(神殿)と律法とに逆う言葉を吐いて、どうしても、やめようとはしません。「あのナザレ人イエスは、この聖所を打ちこらし、モーセがわたしたちに伝えた慣例を変えてしまうだろう」などと言う」と。

この訴え側の証言は大筋に於いて事実であるに相違ない。私達は、ここに、はからずも、訴え側の証言によって、殉教の厳しい戦の中にイエス様からステパノへ、ステパノからパウロへと承け継がれた、福音の生命が何であるかを知る。それは常にカソリック形骸化に対するプロテスタントの抗議精神である。

参照引用句。

マルコ十四・58。マタイ二七・40。→行伝・六・13・14。七・48。→コリントI・三・16。II・六・16。

ヨハネ福・七・23・24。→行伝七・51。(ああ、強情で、心にも耳にも割礼のない人たちよ)。→ロマ二・29。ピリピ三・3B。

とも角、サンヘドリンに於けるステパノの演説は、従来のイスラエル民族の歴史解釈と異り、恩恵に対する彼等の反逆、律法主義者の偽善性に対する厳しい攻撃、神殿宗教の違法性と廃棄、イエス・キリストの十字架と聖霊に対する頑な拒絶と心の割礼等、それらは、選民中の選民を以て自任する彼等の独善主義に切込む、自由な角度からの鋭い批判である

激昂する民衆とサンヘドリンの議員達の嵐の前に、一瞬の静寂がある。動と静と。「ああ、天が開けて、人の子が神の右に立っておいでになるのが見える」と。

恐らくステパノの石打ちの殉教は、サンヘドリンの正式な判決も待たず殺到した民衆による私刑であったろう。

「彼等がステパノに石を投げつけている間、ステパノは祈りつづけて言った、「主イエスよ、わたしの霊をお受け下さい」。そして、ひざまずいて、大声で叫んだ、「主よ、どうぞ、この罪を彼らに負わせないで下さい」。こう言って、彼は眠りについた。」と。それは、大きな鏡に対する、小さなあわせ鏡の反映である。(ルカ二三・34。46。)

註、イエス様の純福音は、ヘレニスト、ステパノへ、ステパノから、ヘレニスト、パウロへと継承された。確かに行伝七・58Bと八・一Aのステパノとパウロの関係、こういう劇的な出会いが、第一資料であるパウロの手紙に一言の言及もないことは、奇異な感を受ける。ボルンカムは、ルカの筆による結合として否定する(パウロその生涯と使信—現代神学双書P46)。しかし、年代からいっても、活動の舞台から考えても、この両極のヘレニストの火花は、ありうることと考える。(石原兵永先生、パウロの生涯・P17-18。)

エルサレム集会に対する大迫害が起こって、四散したのはヘレニスト・グループの人達であった。くもの子を散らす如くに。但し生命の光を掲げて。宗教的偏見から使徒達すら、ちゅうちょしていたサマリヤ伝道に挺身したピリポの活動が行伝八・4-40にしるされた。独りピリポに限らなかつたであろう。私達はすでにパウロの回心まゝにダマスコにヘレニストの集会があり、シリアのアンテオケ集会も、ローマの集会も、パウロの建設した集会ではなかつた。アンテオケ集会は異邦人への初期福音伝道の基地集会の役割を果たしたことを知っている。

次に中間派とも言うべき、主、イエス様の御生前から従ったペテロ、ヨハネ等の使徒達を中心とする土着の穏健派である。彼等はヘブル語(行伝六・1B)、即ち当事のアラム語を話す人々であった。彼等、肉に於いてイエス様に親しんだ使徒達は、(御生前にもそうであったが)十字架の意味、復活の意味を、又律法との関係等を、古代の銅鏡をみる如く、「おぼろげに」しか把握できなかつた。それ故、伝統的ユダヤ教の礼拝と慣習とに絶縁することはできなかつた。ユダヤ教の信仰とは異なる明確な意識もなかつたと思われる。ユダヤ教徒側から言わせると、無害(ハームレス)な存在であった。それ故彼等は「絶えず宮もうでをなし」(二・46)、恩師イエス様の審かれたサンヘドリンの庭で礼拝の時を守り(三・1-3)「ソロモンの廊に集って」説教(F・Fブルース・行伝P132)することすらできた。彼等は民衆の尊敬と、擁護(五・26)すら勝ち得ていた。勿論、使徒筆頭であるペテロにエルサレム神殿の当局者が注目して、圧迫を加えたことは事実であろうが、そこには嵐のようなステパノの場合と異なるものを感じる。圧迫者達もサドカイ派の宮守りがしらや、祭司長の家の人達で(五・24)、ユダヤ教の理想主義者又律法主義者であるパリサイ派の人々の名がみえず、サンヘドリンの学者ガマリエルの厚意的辯護すらきかれる。

否、パリサイ派の人々から集会に帰依する者も多かつた。

註1 三・1。「午後三時の祈りのとき」エルサレム神殿の祈禱式(シエモネ・エスレの祈一十八の祝福一)である。(ダニエル・ロブス、イエス時代の日常生活P78)。

註2 ガマリエルの辯護的演説については、「ルカの筆」として争われている。断定不能。

ステパノの殉教後に加えられたエルサレム集会への迫害に対しても、使徒達はむしろ安全であったという注目すべき、奇異な句が八・1Bにある。彼等使徒達は六・1-6の記事と併せ考えるとき、初期エルサレム集会内のヘレニストの信仰が、あまりに急進的極端とみなしてか、或は、その旺盛な活動が、反って誤解?と圧迫を招くとしてか、むしろ兄弟達の排除されるのを見送った観ある。

又宗教的偏見に捕われないヘレニスト達が、サマリヤに逃れサマリヤ人達に勇敢に伝道活動をするときも、使徒達の傍観的態度が推想される。活動のあとから、ノコノコと母教会の権威で公認にゆく趣がある。(O・クルマン、アルパ新書、川村氏訳「イエスと当事の革命家たちP105に学ぶ)。

第三は恐らくパリサイ派から帰依してきた律法主義者達のグループである。エルサレム集会内の自由の信仰の活動家達であるヘレニストが排除駆逐されて、(或は彼等第三のグループが原因か?)、これに代って次第に勢力を伸して来たのが、先にも述べたパリサイ派の終末観を抱いて律法の励行によりて神の国が近づき、義人は律法(己が義)によりて生くと信じる人々である。今日ではユダヤ教徒達はイエスは、改革的予言者の一人と信じられている由である。そして、やがて血族関係を重んずるヤダヤ人の伝統により主の兄弟、「義人ヤコブ」(コリントI・十五・50)が次第に集会の柱として、ペテロやヨハネがエルサレムを離れるに従って彼等をしのぐようになったと思われる。しかも始末の悪いことには、これら律法に熱心な人達は、エルサレム母教会の歴史的権威をカサに着て、ヘレニスト達や、パウロの開拓した集会に査察に来て、律法(割礼や未改宗の異邦人との交りの監視)を強要し、パウロの使徒職は、エルサレム教会の承認をえない自称勝手な偽使徒である、として中傷したのである。パウロが命がけで宣伝した、人は信仰のみによって救われる、この福音の自由を脅かしたのである。行伝十五・5の「ところが、パリサイ派から信仰にはいつてきた人たちが立って「異邦人にも割礼を施し、またモーセの律法を守らせるべきである」と主張した。とはエルサレム教会内の性格を物語っている。ペテロ-パレスチナの踏みかためられた信仰地盤の中で、イエス様に随従時代から、幾度も失敗を繰返しながら、純情素朴で直情径行、新しい真理をまもるに柔軟性を示したペテロ、-又且てはイエス様を受け入れないサマリヤ人を「天から火をよび下して焼き払う」ことを求めた「雷の子」(ボアネルゲ)のあだ名を頂いた烈しく純粋なヨハネ(ルカ・九・54。マルコ・三・17。))。彼等が福音を伝えてエルサレムを去るに及んで、エルサレム集会の大勢は律法主義者でかためられ、ユダヤ教徒と変らない存在となった。彼等は紀元七〇年のローマによるエルサレム攻略と共に歴史の流れから消え去った。ひとたびは聖霊降下を体験したのであろう穏健派中の人々も、恩恵と使命を実生活の活動に転じない信仰は、情性と形骸の中に死滅したものと思われる。

福音に対して柔軟性のある理解をもったペテロが(エルサレム集会の律法主義者達の勢力が、ペテロや、ヨハネを居ずらくした面もあるのではないであろうか)ヘレニスト達がアンテオケ集会で、割礼のない異邦人達と、ユダヤ人の慣習に拘束されることなく、親しく食卓を共に(同信兄弟の聖餐)している美しい光景に接したとき、感動して、ペテロもバルナバも、この交りに加わっていたのであろう。そこへエルサレム集会のヤコブのもとから派遣された律法主義者の査察員達が来たため、ペテロは怖れをなして態度を変えて、異邦人との交りから身を引いた。このことは割礼ということが、使徒達をも拘束した重いユダヤ人の伝統であったかを改めて知る。そして割礼なくして信仰のみで救われるとの確信に立って、割礼なき異邦人伝道を使命としたパウロの厳しい追求をうけた(ガラテヤ二11・14)。のみならず、同じヘレニストで、かつては、兄弟達の激しい迫害者であったサウロ(パウロ)の回心を認めて、アンテオケ集会に連れてきて紹介の労をとった、パウロの先輩である「バルナバまでが、そのような偽善に引ずり込まれた」と。

この衝突は、勿論福音の本質の認識把握、又信仰の徹底性の相違、事の本質を見抜く大事な時のパウロの強さ、ペテロの弱さ(マルコ・十四・69-72)であるが、一面には既にエルサレム集会に於けるペテロの軽視が察せられる。又この事件が、初期エルサレム集会で(行伝四・36、37)又アンテオケ集会で(九・26-28。十一・22-30)有力な働きをしたバルナバが、やがてパウロと袂を別つ(十五・36-41)に至る伏線となったであろう。又エルサレム母教会をかさに着て信仰査察にきた律法主義者達に対して、パウロが妥協したとも考えられぬ。ルカは筆を避けているが、アンテオケ集会内では後輩であるパウロの、こうした強硬な態度は、集会員の感情的反感も呼んで、軋轢、乃至みぞが出来たことも考えられる。アンテオケ集会が以後パウロにとって次第に住みこちのよい集会でなくなったと考えてよいと思う。彼の曲げられぬ主張が、自ら建設した集会でないだけに、それだけ複雑な立場と心理で、後のガラテヤの諸集会等の場合とは異ると思われる。

「勇者は一人立つ時最も強し」(シルレル)。

パウロは前進した。バルナバと別れて、彼はキリキヤの峽門を通り、タウルスの山を越え、彼が且て厳しい福音伝道の戦で土台をすえたデルベ、ルステラ、イコニオム、ピシデヤのアンテオケ等、南ガラテヤの諸集会の信仰をかためた。ルステラでパウロは若き伝道のアシスタント、テモテを得た。

第74号 (1974年12月)

裁く者と裁かれる者

人をさばくな。自分がさばかれたいためである。

(マタイ七、一)

「さばき」とは何か、まず偽と真を明かにし、次に偽からその地位、力、栄光を奪

うことであろう。この世は、偽の地位、力、栄光が満ち、まかり通っている。誰かが、真と偽を明かにし、偽の地位、力、栄光を追放しない限り、この満ち満ちている混迷と錯倒を直すことはできないであろう。

さばく者は誰か、さばかれる者は誰か。いまより約二千年前のむかし、この世のすべての者からさばかれて、十字架上に無惨な敗北の生涯をさらした人があった。その名はイエス。彼をさばいたのは、祭司、長老、学者、ローマの官憲、群集、さらに彼が愛し教えた弟子たちですらあった。

裁く者と裁かれる者との関係は、少くもイエスの伝記に関する限り、この世と全く逆の立場を取っている。然り、いまもおそらくこの形は変わらないのではないか。今日イエス在し給えば、我らは声を大きくして、このインチキ、まやかし者と顔につばし、彼を処刑することを喜ぶであろう。

実に我らのこの真理づらが、神を足げにし、イエスを毎日十字架にかけつつあるのではなかろうか。(半田)

第75号 (1975年)

偉大なる旅人の生涯

一九七五年一月二十六日一人の偉大なる旅人が、裏日本の小都市鶴岡で、僅かな親族友人に見守られながら静かに世を去った。この人こそ誰あろう日本の生んだ最大の予言者内村鑑三の特愛の弟子の一人諏訪熊太郎先生その人である。

その唯一の著書「信仰一人旅」の自序にいう。

「思えば苦勞の多い生涯であった。恵まれた生涯であった。少しの力で努力した生涯であった。」と。

八十四年の生涯のうち、晩年の十数年を除いて、先生の人生はまさに苦難の連続であった。多くの真の信仰者がそうであるように、先生は、いかなる困難も、父なる神の愛の鞭としてこれを受けとめた。もし、田舎という日本語が、真の故郷を意味するなら、先生こそ真の田舎キリスト者であった。先生の国籍は天にあり、先生は遣わされて、この世における偉大な使命を終り、いま静かに故郷に帰還したのである。

およそこの国の政治、経済の表舞台とは無関係なこの天国人の旅姿は、人の眼に少しも見栄するものでなかった。しかし、先生ほどに人の世のかなしみと苦しみを越えて、真のよろこびと希望を知る人はなかったのではないか。先生の生涯を知れば知る程、私たちはイエスキリストの十字架と復活の実証者をこの眼で見るのである。私たちもまた先生の生涯にあやかりたいとしみじみ思う。(半田)